

公表版

# 令和7年度 学校外の子供の多様な 学びに関する調査研究事業 実施報告書

令和8年1月

明治学院大学ラボ



# 目次

第1章 調査研究の概要.....	4
1.1 調査研究の目的.....	4
1.2 調査対象（参加者）.....	5
1.3 活動内容.....	5
1.4 検証内容・方法.....	5
1.5 子供の心理面への配慮.....	6
1.6 実施体制・役割.....	7
1.7 実施スケジュール・工程.....	8
第2章 各回の活動の構成・内容の効果分析.....	10
【第1回 10月28日火曜日 15:10-16:20】.....	10
第2回 11月11日火曜日 15:10-16:20].....	18
第3回 11月18日 火曜日 15:10-16:20].....	23
第4回 11月25日 火曜日 15:10-16:20].....	28
第5回 12月2日 水曜日 15:10-16:20].....	33
第6回 12月9日 火曜日 15:20-16:10].....	40
第7回 12月16日 火曜日 15:20-16:10].....	47
第8回 12月23日 火曜日 15:20-16:10].....	53
第3章 子供の特性と変化の分析.....	61
4-1. あ1の変化について 中学生.....	62
4-2. あ2の変化について 中学生.....	64
4-3. あ3の変化について 中学生.....	67
4-4. あ4の変化について 中学生.....	70
4-5. い2の変化について 中学生.....	72
4-6. う1の変化について 中学生.....	75
4-7. う4の変化について 小学校高学年.....	77
4-8. お3の変化について 中学生.....	79
第4章 支援者に必要な資質・能力の分析（任意）.....	81
4.1 支援者に必要な資質・能力の検証方法と仮説.....	81
4.2 支援者に必要な資質・能力の検証における記録方法.....	81

4.3 支援者に必要な資質・能力の検証における分析ツール・手法 .....	81
4.4 支援者に必要な資質・能力の検証における検証結果 .....	81
4.5 まとめ .....	83
<b>第5章 調査研究に関する総括 .....</b>	<b>85</b>
5.1 調査研究において実施された活動内容の効果 .....	85
5.2 支援者に必要な資質・能力 .....	85
5.3 今後の課題 .....	86
5.4 まとめ .....	86
<b>第6章 フリースクール等における研究成果の実践 .....</b>	<b>87</b>
6.1 実践のための条件 .....	87
6.2 当該活動により効果が表れやすい子供 .....	88
6.3 望ましい場所・環境 .....	88
6.4 フリースクール等での実践（少額の費用・少数の人員で実践する方法） .....	88
6.5 実践に向けた留意事項 .....	89

# 第 1 章 調査研究の概要

## 1.1 調査研究の目的

○調査研究テーマ「社会力の育成を通して、キャリア意識を向上させる活動 ～大学生と関わり、共感能力を高め、自己理解を深める～」

社会力育成を通して、参加者の「キャリア意識：キャリア発達に関わる基礎的な意欲・態度・能力に対する個人の自己評価（新見・前田，2009）」を向上させることを目標にした活動である。

不登校の支援については、学校復帰という結果のみを目標とするのではなく、広く「進路の問題」と捉え、児童生徒の社会的自立を目指す支援が重要であると考えられている。つまり、不登校を「キャリア成熟」「キャリア選択」の課題と捉えて、当該児童生徒の「キャリア意識」を高めることが必要である。文部科学省（2023）は、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」といった「基礎的・汎用的能力」の確実な育成がキャリア教育の中心課題であるとしている。一方で、「社会力」とは、「社会を作り、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくために必要な資質や能力」である。社会力の基盤になる能力は、「一つは他者を認識する能力であり、あと一つは他者への共感能力ないし感情移入能力である」（門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書、1999年、59-68頁）とされており、その育成にあたっては多様な他者と多様な活動（協働的な活動）を行うことが重要であるとされている。このように、「社会力」はキャリア教育における「基礎的・汎用的能力」（特に「社会力の基盤になる能力」については、「人間関係形成・社会形成能力」や「自己理解・自己管理能力」）と共通する部分が多い。

そこで、本研究では大学生パートナーとともに「社会力の基盤となる能力」を育む子を目指した活動を行い、参加した子どもたちのキャリア意識がどのように変化するかについて明らかにする。第一部として、「他者を意識した活動」を行うことで、他者への関心を高め、他者への共感能力を高める（第2～5回）。また、共感能力が高まると、他者の立場になって物事を考えられるようになり、自己認識もできるようになる。そこで、自己のことを振り返りつつ、未来の自分についても考えていくような「自己を意識した活動」を行うことで自己理解を深める（第6～8回）。

大学生パートナーの共感的・肯定的な関わりのもと、活動時の動画や音声の記録データと、子どもの振り返りシートを分析し、共感能力と自己理解を高めることによって、キャリア意識を向上させる手法を検証する。キャリア意識の向上によって、参加する子どもの「学ぶ意欲」や「学ぶ力」の向上が期待される。また、大学生パートナーの変化も検証する。

## 1.2 調査対象（参加者）

学年	人数		備考
	滝野川高等学院	アイディア高等学院	
小学校低学年(1・2年生)	0名	0名	
小学校中学年(3・4年生)	0名	0名	
小学校高学年(5・6年生)	1名	1名	
中学校 1・2・3年生	8名	5名	
合計	計 15名		

## 1.3 活動内容

### 第1回：大学生のことを知ろう①

6人の大学生が大学生活で楽しかったことを発表する。

### 第2回：ポッチャ&モルック体験

子どもと大学生がチームとなり、チーム対抗戦をする。

### 第3回：共創ゲーム

子どもと大学生が、一緒にゲームを考えて実施する。

### 第4回：他者紹介動画作り

子どもが大学生にインタビューをして、紹介動画を作成する。

### 第5回：多様な他者との出会い

赤ちゃん、障がい者、外国人、高齢者と交流する。

### 第6回：ジブリ映画からの気持ち探し①

登場人物やセリフに注目し、自分の気持ちや未来等について言語化する。

### 第7回：ジブリ映画からの気持ち探し②

登場人物やセリフに注目し、自分の気持ちや未来等について言語化する。

### 第8回：大学生のことを知ろう②

大学生による専門分野や就職先等の発表を聞き、自分の将来について考える。

## 1.4 検証内容・方法

<検証内容>

- ①子どもの他者への関心、共感能力の向上の分析（主に第1回～第5回活動の分析）
- ②ポッチャ等の身体的な活動を通しての変化（主に第2回活動の分析）
- ③ジブリ作品を通して共感能力の向上、自分の気持ちの理解と言語化（主に第6、第7回活動の分析）

- ④学びの動機づけを高める（キャリア意識の変化）（主に第8回の活動の分析）
- ⑤大学生の成長や変化（主に全8回の活動の分析）

#### <方法>

以下のデータを分析する。

##### (1) 子どもデータ

- ・各回の振り返りデータ
- ・活動全体の振り返りデータ
- ・第1, 3, 4, 6, 7, 8回の活動中の音声データ
- ・第8回の感想シート

##### (2) 大学生データ

- ・事前調査と事後調査
- ・各回の振り返りデータ
- ・1月6日（火）4限の振り返りの音声データ

##### (3) FS等のデータ

- ・各回の振り返り音声データ
- ・アデコスタッフのレポート

### 1.5 子供の心理面への配慮

- ①発達障害特性等により配慮の必要な参加者への関わり：事前に配慮事項についてフリースクールの担当者と十分な情報教諭を行い、特別支援教育を専門とする研究担当者を中心に参加する大学生に事前指導を行う。
- ②心理的な安全性の担保：臨床心理学を専門とする研究担当者を中心に、子どもたちが安心して参加できるように、共感的・肯定的な関わり的重要性や具体的な方法について参加する大学生に事前指導を行う。
- ③退避スペースの確保：活動中に、気分が悪くなった子どもややる気を失った子どものために、退避スペースを用意し、そこで休めるようにする。

## 1.6 実施体制・役割

団体種別	団体名称	役割	氏名
幹事団体	明治学院大学	研究代表者（研究全体の統括）	文学部教職課程教授 石井久雄
		研究担当者（活動全般の担当・研究代表補佐）	文学部教職課程専任講師 日下虎太郎
		研究担当者（調査分析の担当・研究代表補佐）	心理学部教育発達学科助教 岡田悠佑
		研究担当者（調査分析の担当・研究代表補佐）	心理学部教育発達学科専任講師 杉岡千宏
		研究担当者（調査分析の担当・研究代表補佐）	文学部教職課程教学補佐 坂口彩乃
外部講師①		第5回外国人	
外部講師②		第5回外国人	
外部講師③		第5回高齢者	
外部講師④		第5回赤ちゃん	
外部講師⑤		第5回赤ちゃんの母	
外部講師⑥		第5回障がい者	
外部講師⑦		第8回大学生報告者	
外部講師⑧		第8回大学生報告者	
外部委託		文字起こし	
学生スタッフ	明治学院大学	児童生徒の伴走支援等	23名
協力 FS①	フリースクール滝野川高等学院	児童生徒の引率、情報提供	
協力 FS②	アイディア高等学院中等部	児童生徒の引率、情報提供	

## 1.7 実施スケジュール・工程

### ① 協定締結～調査研究の活動前

No.	日程	対応・調整内容	対応者
1	8/6	キックオフミーティング	協力フリースクール、事業プロモーター、東京都
2	8/19	第1回事前ヒアリング（フリースクール滝野川高等学院）	協力フリースクール、事業プロモーター
3	8/20	第1回事前ヒアリング（アイディア高等学院中等部）	協力フリースクール、事業プロモーター
4	9/10	第2回事前ヒアリング（フリースクール滝野川高等学院）	協力フリースクール、事業プロモーター、東京都
5	9/10	第2回事前ヒアリング（アイディア高等学院中等部）	協力フリースクール、事業プロモーター、東京都
6	9/19	協力フリースクール内での参加児童生徒の確定	事業プロモーター、東京都
7	9/19	研究実施計画書及び安全対策個別方針提出	東京都

## ② 調査研究の活動期間中

活動回	日程	活動の内容	実施場所
1	10/28(火) 15:10-16:20	● 大学生のことを知ろう①：6人の大学生が大学生活で楽しかったことを発表する。	①
2	11/11(火) 15:10-16:20	● ボッチャ&モルック体験：子どもと大学生がチームとなり、チーム対抗戦をする。	①
3	11/18(火) 15:10-16:20	● 共創ゲーム：子どもと大学生が、一緒にゲームを考えて実施する。	①
4	11/25(火) 15:10-16:20	● 他者紹介動画作り：子どもが大学生にインタビューをして、紹介動画を作成する。	①
5	12/2(火) 15:10-16:20	● 多様な他者との出会い：赤ちゃん、障害者、外国人、高齢者と交流する。	①
6	12/9(火) 15:10-16:20	● ジブリ映画からの気持ち探し①：登場人物等から、自分の気持ち等について言語化する。	①
7	12/16(火) 15:10-16:20	● ジブリ映画からの気持ち探し②：登場人物等から、自分の気持ち等について言語化する。	①
8	12/23(火) 15:10-16:20	● 大学生のことを知ろう②：大学生の発表を聞き、自分の将来について考える。	①
随時	随時	・ 事業プロモーターが制作する事業広報動画への協力	① ②
随時	随時	・ 事業プロモーターが制作する事例集の素材提供	①

### <実施場所>

- ・ 実施場所①明治学院大学白金キャンパス アートホール  
〒108-8636 東京都白金台 1-2-37
- ・ 実施場所②明治学院大学白金キャンパス本館 6階多目的ルーム  
〒108-8636 東京都白金台 1-2-37

## ③調査研究の活動終了～協定締結期間終了

No.	日程	対応・調整内容	相手先
1	1月	調査研究結果の取りまとめ・調査研究実施報告書の提出	東京都
2	3月	調査研究結果の提出	東京都

## 第 2 章 各回の活動の構成・内容の効果分析

**【第 1 回 10 月 28 日火曜日 15:10-16:20】**

各回の活動概要

<活動タイトル>

「大学生のことを知ろう①」

<実施場所>

- ・ 実施場所①明治学院大学白金キャンパス アートホール  
〒108-8636 東京都白金台 1-2-37

<出席者>

第1回 参加者							
	大学生	子ども			大学生	子ども	
A	A1	あ1		B		い1	
グル		あ2		グル	B2	い2	
ープ		あ3		ープ	B3	い3	
		あ4			B4	い4	
C	C1	う1		D		お1	
グル	C2	う2		グル	D2	お2	
ープ	C3	う3		ープ	D3		
* 大学生追加メンバー：E1,E3,E4,E5,E6							
<出席者>							
大学生：合計 14名 子ども：合計13名							
ラボ関係者：4名							
その他出席者（FSスタッフ等）：6名							

\* A～D の 4 つのグループに分けた。グループの中で、できるかぎり大学生と子どもが 1 対 1 で関われるようにした。

<活動内容と狙い>

- ・ 第 1 回目の活動なので、子どもたちに大学生のことを知ってもらうことを目的とした。

### ＜環境設定と狙い＞

- ・子どもたちが活動に集中できるように、閉鎖的な空間であるアートホールで実施した。
- ・少人数で交流が出来るようにグループに分けた。
- ・できるだけ、子どもと大学生が1対1でペアになるようにした。
- ・できるだけ、男女比が同じになるようにした。
- ・教員免許取得を目指す大学3～4年生（10名程度）が「大学生パートナー」として子どもたちと共感的・肯定的に関わる。

### ＜安全対策＞

- ・熱中症：冷暖房完備の室内での活動なので、熱中症の危険はない。
- ・ケガのリスク：体育科教育学、スポーツ教育学を専門とした研究担当者を中心に、リスクマネジメントを行う。体を動かす活動の際は、子ども一人につき学生一人か、子ども数名につき学生一人をつけ、子どもがケガをしないよう注意するとともに、活動中に、全体を見渡すスタッフを配置する。
- ・発達障害特性等により配慮の必要な参加者への関わり：事前に配慮事項についてフリースクールの担当者と十分な情報教諭を行い、特別支援教育を専門とする研究担当者を中心に参加する大学生に事前指導を行う。
- ・心理的な安全性の担保：臨床心理学を専門とする研究担当者を中心に、子どもたちが安心して参加できるように、共感的・肯定的な関わり的重要性や具体的な方法について参加する大学生に事前指導を行う。
- ・個人情報への配慮：子どもと大学生は、ニックネームで呼び合うようにし、個人が特定されないようにした。

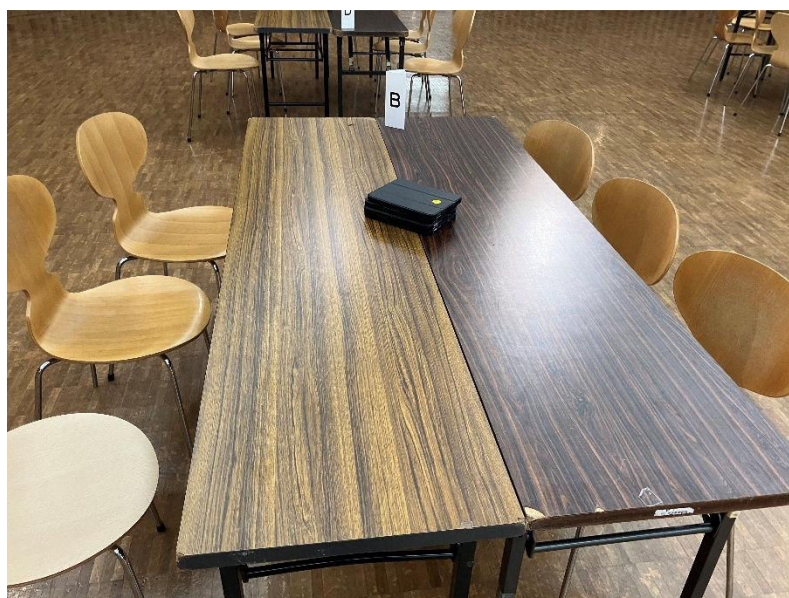
活動は全て大学のアートホールを使用。十分な広さのある空間を確保できた。



前方にはスクリーンを投影し、活動説明等で活用した。



活動の最後に子供たちへのインタビューを実施できるよう、各机に ipadmini を配置



### ＜活動のタイムライン＞

- (14 時 30 分) スタッフ集合＜全体打ち合わせ・準備＞ ～40 分
    - ・出席者：6 名
    - ・使用する物品の運搬
    - ・会場の準備（机、イス、スクリーン、マイク、ノートパソコン等）
  
  - (14 時 50 分) 正門に子どもをお迎えに行く（担当者・石井）
  
  - (15 時 10 分) はじめに（担当者・石井） ～5 分
    - ・挨拶、本日の活動について、諸注意等
  
  - (15 時 15 分) 活動①（司会 A1） ～25 分
    - ・グループでの自己紹介
    - ・3 名の大学生の報告①
  
  - (15 時 40 分) 休憩 ～5 分
  
  - (15 時 45 分) 活動②（司会 A1） ～25 分
    - ・3 名の大学生の報告②
  
  - (16 時 10 分) インタビュー（担当者：石井） ～5 分
    - ・子ども調査の実施（大学生が子どもにインタビューして入力か子ども自身が入力）
  
  - (16 時 15 分) おわりに（担当者：石井） ～5 分
    - ・挨拶、次回の活動について、諸注意等
  
  - (16 時 20 分) 後片付け（担当者：全員） ～25 分
    - ・会場の撤収
- 子供、協力フリースクール帰宅 ---
- (16 時 45 分) スタッフでの振り返り（担当者：石井） ～10 分
    - ・本日の振り返り、次回の活動の確認等

## ＜該当回の活動内容に対する子供の反応・分析結果＞

### (1) 活動の楽しさ

子ども調査で「今日の活動は楽しかったですか？」(N=13)の項目で、「とても楽しかった」は84.6%、「少し楽しかった」は7.7%、「どちらともいえない」は7.7%であった。第1回目の活動は、子どもたちにとって楽しいものであったことが分かった。

### (2) 活動への感想・意見

子ども調査で「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」(N=13)の項目の回答をみてみよう。「大学生のことを知れた」、「大学はとっても自由だなと思った。あと楽しそう」、「皆さんの話がとても面白く聞きやすかったです。また行きたいなと思いました」といった回答があった。なお、否定的な回答は「話を聞いている時間が少し長かったので、話し合いの時間をもっと増やしてほしいです」の1つだけであった。このように、第1回目の活動に関しては、「大学生のことを知ろう」という活動から様々な学びがあった様子が見えてくる。

### (3) 具体的な内容について

子ども調査で「高校や大学、専門学校ではどんな勉強するのかを知りたいと思う」(N=13)の項目では、「とてもそう思う」は46.2%、「わりとそう思う」は38.5%、「あまりそう思わない」は15.4%であった。「とてもそう思う」と「わりとそう思う」の合計は、84.7%であり、多くの子どもにとって、大学等に関心が高まったといえる。次に、「友だちのよいところをもっと知りたいと思う」(N=13)の項目で、「とてもそう思う」は46.2%、「わりとそう思う」は53.8%であった。多くの子どもにとって、他者への関心が高まったといえる。

これらのことから、第1回目の活動で、大学生が学生生活や趣味等について報告したことで、子どもたちは他者への興味がわき、もっと知りたいという気持ちが生まれてきたといえそうである。

## ＜該当回の環境設定に対する子供の反応・分析結果＞

### (1) 大学生との関わりについて

子ども調査で「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嬉しかった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください(自由記述)」(N=13)の項目の回答をみてみよう。「意見を強制されずに楽しく教えてもらった」、「丁寧に接してくれたのが嬉しかったです」、「みんな優しくてすぐ馴染むことができました」といった回答があった。

次に「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嫌だった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください(自由記述)」(N=13)の項目の回答をみてみよう。「話を聞いている時間が長かったです」の回答のみであった。

これらのことから、大学生パートナーが、子どもたちと共感的・肯定的に関わる事が出来ていたのではないかと推察できる。

### <振り返り等による気づき>

・FSとの振り返りで、「はじめに」の時に本日の活動についてもう少し詳しく説明して欲しい、会場の退避スペースの位置等を変更して欲しい、ヘッドホンをして会場に入ってくる学生がいる等の意見が出された。

### <次回に向けた改善点>

・「はじめに」の時に、本日の活動について詳述する。会場の退避スペースを変更する。ヘッドホンをしないように学生に注意する。

### <実施の様子>

初回なのでグループごとの自己紹介を実施した



各グループ子供 3~4 人付き、最低 1 人大学生がサポートについた



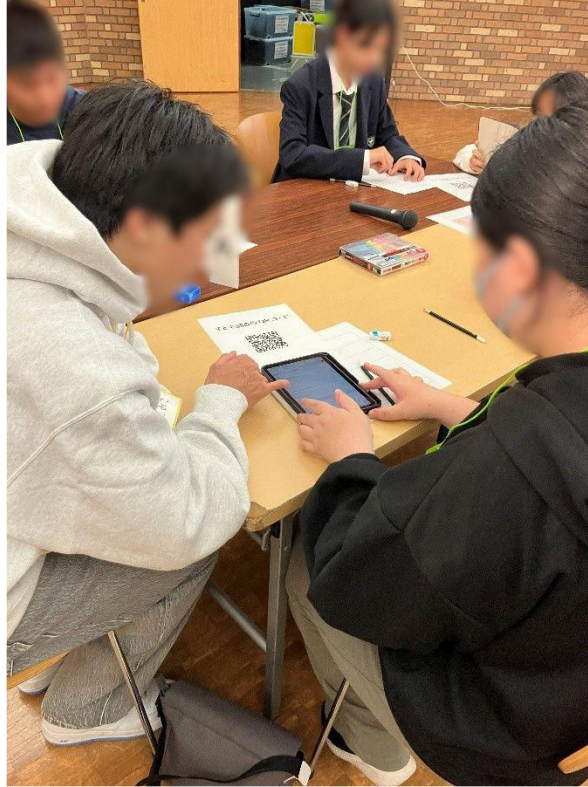
前後半に分かれ、それぞれ 3 人ずつの発表を聞いた



様々なテーマの発表を展開



活動終了後は毎回インタビューを実施し、活動を振り返る



## 資料

- ・資料 1-1：第 1 回活動文字起こしデータ
- ・資料 1-2：第 1 回活動パワポ資料

## 第2回 11月11日火曜日 15:10-16:20】

### 各回の活動概要

#### <活動タイトル>

「ポッチャ&モルック体験」

#### <実施場所>

・第1回活動と同じ。

#### <出席者>

第2回 参加者						
	大学生	子ども		大学生	子ども	
A	E6	あ1		B	B1	
グル	A2	あ2		グル	B2	い2
ープ	A3	あ3		ープ	E2	い3
	E4	あ4			B4	
C	C1	う1		D	D1	う4
グル	C2	う2		グル	D2	お1
ープ	C3			ープ	D3	お3
* 司会：A1 * 大学生追加メンバー：E3						
<出席者>						
大学生：合計16名 子ども：合計11名						
ラボ関係者：4名						
その他出席者（FSスタッフ等）：6名						

\*A～Dの4つのグループに分けた。グループの中で、できるかぎり大学生と子どもが1対1で関われるようにした。

#### <活動内容と狙い>

・ポッチャ&モルックといった身体的活動を取り入れ、子どもと大学生のコミュニケーションを促進するとともに、お互いの距離を縮めることを目的とした。

#### <環境設定と狙い>

・第1回活動と同じ。

### ＜安全対策＞

- ・第1回活動と同じ。

### ＜活動のタイムライン＞

- （14時30分）スタッフ集合＜全体打ち合わせ・準備＞ ～40分
    - ・出席者：6名
    - ・使用する物品の運搬
    - ・会場の準備（机、イス、スクリーン、マイク、ノートパソコン等）
  
  - （15時10分）はじめに（担当者・石井） ～5分
    - ・挨拶、本日の活動について、諸注意等
  
  - （15時15分）活動①（司会 A1） ～25分
    - ・ポッチャ（チーム対抗戦）
  
  - （15時40分）休憩 ～5分
  
  - （15時45分）活動②（司会 A1） ～25分
    - ・モルック（チーム対抗戦）
  
  - （16時10分）インタビュー（担当者：石井） ～5分
    - ・子ども調査の実施（大学生が子どもにインタビューして入力か子ども自身が入力）
  
  - （16時15分）おわりに（担当者：石井） ～5分
    - ・挨拶、次回の活動について、諸注意等
  
  - （16時20分）後片付け（担当者：全員） ～25分
    - ・会場の撤収
- 子供、協力フリースクール帰宅 ---
- （16時45分）スタッフでの振り返り（担当者：石井） ～10分
    - ・本日の振り返り、次回の活動の確認等

### <該当回の活動内容に対する子供の反応・分析結果>

#### (1) 活動の楽しさ

子ども調査で「今日の活動は楽しかったですか？」(N=11)の項目で、「とても楽しかった」は90.9%、「少し楽しかった」は9.1%であった。第2回目の活動は、子どもたちにとって楽しいものであったことが分かった。

#### (2) 活動への感想・意見

子ども調査で「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」(N=11)の項目の回答をみてみよう。「体を動かせて、楽しかった」、「自分は運動があまり得意ではなかったが、とても楽しく取り組めました」、「やったことがないスポーツをやってみてとても楽しかった」、「スポーツを通じて楽しく大学生と関わることができたと思う」といった回答があった。なお、否定的な回答はなかった。

このように、第2回目の活動に関しては、ポッチャ&モルックといった身体的活動を大学生と一緒にやることで、子どもたちは、楽しいひとときを過ごしつつ、大学生と仲良くなった様子が見えてくる。

#### (3) 具体的な内容について

子ども調査で「難しいことでも、やる気になったら、できると思う」(N=11)の項目では、「とてもそう思う」は54.5%、「わりとそう思う」は45.5%であった。「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の回答はなかった。これまでやったことのないスポーツにチャレンジしたことで、他のことにも挑戦しようという意欲が湧き上がったのかもしれない。また、「友だちの気持ちを大切にすることができると思う」(N=11)の項目では、「とてもそう思う」は27.3%、「わりとそう思う」は72.7%であった。「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の回答はなかった。大学生とチームを組み、体を動かすことで、他者の気持ちを尊重しようという気持ちが高まったのかもしれない。

これらのことから、第2回目の活動で、大学生とポッチャ&モルックをすることで、チャレンジする気持ちや他者を大切にすることが増大したといえそうである。

### <該当回の環境設定に対する子供の反応・分析結果>

子ども調査で「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嬉しかった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください(自由記述)」(N=11)の項目の回答をみてみよう。「いろいろ話せて嬉しかったです」、「みんな優しくかった」、「点をとった時にナイスなど言ってくれたこと」、「B2 君とグータッチをしたのが楽しかった」といった回答があった。次に「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嫌だった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください(自由記述)」(N=11)の項目では、「ない」という回答だけだった。

これらのことから、大学生パートナーが、子どもたちと共感的・肯定的に関わる事が出来ていたのではなにかと推察できる。

### <振り返り等による気づき>

・FS との振り返りでは、活動自体への批判は無かった。ただ、子どもたちが、明治学院大学に来るのに時間がかかるので、行き帰りでぐったりするという話が出た。

### <次回に向けた改善点>

・第2回の活動が終わり、会場設定等で課題となることは、ひとまず無くなった。

### <実際の様子>

前半はボッチャを実施



後半はモルックを実施



チーム対抗で行ったため、盛り上がりを見せた



資料

- ・資料 2-1：第 2 回活動パワポ資料

### 第3回 11月 18日 火曜日 15:10-16:20]

#### 各回の活動概要

##### <活動タイトル>

「共創ゲーム」

##### <実施場所>

・第1回活動と同じ。

##### <出席者>

第3回 参加者							
	大学生	子ども			大学生	子ども	
A	A1			B	E3	い1	
グル	A2			グル	B2	い2	
ープ	A3	あ3		ープ	B3		
	A4	あ4			B4	い4	
	大学生	子ども			大学生	子ども	
C	C1	う1		D		お1	
グル	C2			グル	D2		
ープ	C3	う4		ープ	D3	お3	
* 司会：B1 * 大学生追加メンバー：E1,E4,E6							
<出席者>							
大学生：合計 17名 子ども：合計9名							
ラボ関係者：4名							
その他出席者（FSスタッフ等）：6名							

\*A～Dの4つのグループに分けた。グループの中で、できるかぎり大学生と子どもが1対1で関われるようにした。

##### <活動内容と狙い>

・子どもと大学生が、一緒にゲームを考えて実施する活動。ゲームを創り遊ぶときに、子どもと大学生がたくさんコミュニケーションをとることになるので、相互理解を深めることを目的とした。

##### <環境設定と狙い>

・第1回活動と同じ。

### <安全対策>

- ・第1回活動と同じ。

### <活動のタイムライン>

- (14時30分) スタッフ集合<全体打ち合わせ・準備> ~40分
  - ・出席者：6名
  - ・使用する物品の運搬
  - ・会場の準備（机、イス、スクリーン、マイク、ノートパソコン等）
- (14時50分) 正門に子どもをお迎えに行く（担当者・石井）
- (15時10分) はじめに（担当者・石井） ~5分
  - ・挨拶、本日の活動について、諸注意等
- (15時15分) 活動①（司会 B1） ~25分
  - ・変形型の「はぁというゲーム」を創る（自分たちでセリフと状況を考える）。
- (15時40分) 休憩 ~5分
- (15時45分) 活動②（司会 B1） ~25分
  - ・変形型の「はぁというゲーム」を行う（自分たちでセリフと状況を実践する）。
- (16時10分) インタビュー（担当者：石井） ~5分
  - ・子ども調査の実施（大学生が子どもにインタビューして入力か子ども自身が入力）
- (16時15分) おわりに（担当者：石井） ~5分
  - ・挨拶、次回の活動について、諸注意等
- (16時20分) 後片付け（担当者：全員） ~25分
  - ・会場の撤収

--- 子供、協力フリースクール帰宅 ---
- (16時45分) スタッフでの振り返り（担当者：石井） ~10分
  - ・本日の振り返り、次回の活動の確認等

### <該当回の活動内容に対する子供の反応・分析結果>

#### (1) 活動の楽しさ

子ども調査で「今日の活動は楽しかったですか？」(N=9)の項目で、「とても楽しかった」は88.9%、「少し楽しかった」は11.1%であった。第3回目の活動は、子どもたちにとって楽しいものであったことが分かった。

#### (2) 活動への感想・意見

子ども調査で「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」(N=9)の項目の回答をみてみよう。「カードゲームができて面白かった」、「ゲームを作るのが楽しかった」、「はあっていうゲームを自分で作ったりあてたりするのが楽しかったです」といった回答があった。なお、否定的な回答は「難しかった」のみであった。

このように、第3回目の活動に関しては、子どもは、ゲームを楽しみ、大学生とたくさんコミュニケーションをとった様子が見えがえる。

#### (3) 具体的な内容について

子ども調査で「自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う」(N=9)の項目では、「わりとそう思う」は55.6%で、「あまりそう思わない」は33.3%、「まったくそう思わない」は11.1%であった。シチュエーションにあった演技をすることを通して、気持ちをわかりやすく伝えることが不得意と感じる子どもが一定数いるものの、自己表現が上手くできている子どもが過半数以上いることが明らかになった。また、「友だちが困ったときには、助けることができると思う」(N=9)の項目では、「とてもそう思う」は33.3%、「わりとそう思う」は33.3%、「あまりそう思わない」は33.3%であった。共創ゲームでお互い助け合いながら楽しんだせいか、困っている人を助けることができると感じた子どもが6割以上になっている。

これらのことから、第3回目の活動で、コミュニケーション能力や他者を助けようと思う気持ちに少し刺激を与えたといえそうである。

### <該当回の環境設定に対する子供の反応・分析結果>

子ども調査で「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嬉しかった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください(自由記述)」(N=9)の項目の回答をみてみよう。「ヒントをくれた事」、「面白いことを言ってくれた」、「話題をふってくれた」、「いろいろ話せて嬉しかったです」といった回答があった。次に「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嫌だった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください(自由記述)」(N=9)の項目では、「ない」という回答だけだった。

これらのことから、大学生パートナーが、子どもたちと共感的・肯定的に関わる事が出来ていたのではないかと推察できる。

### <振り返り等による気づき>

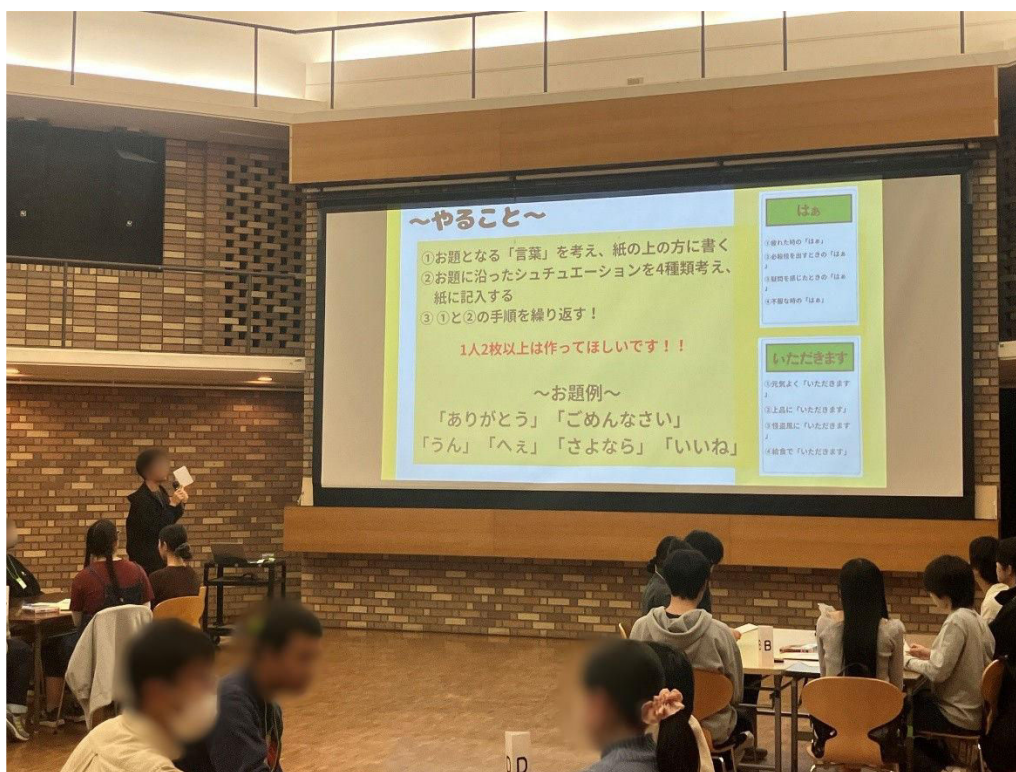
FS との振り返りでは、活動自体への批判は無かった。ただ、子どもたちは、帰りは疲れている様子であることが伝えられた。

### <次回に向けた改善点>

第3回目の活動で、子どもと大学生が本格的に話し合う活動となったが、大きな問題は無く終了してた（大学生のお陰である）。この流れで、次回も行けるのではないかという手応えを感じた。

### <実際の様子>

冒頭でルール説明する様子



お題に沿って各自紙へ記入する様子



各グループ単位でゲームを実施



## 資料

・資料 3-1：第 3 回活動文字起こしデータ

### 第 4 回 11 月 25 日 火曜日 15:10-16:20]

#### 各回の活動概要

##### <活動タイトル>

「他者紹介動画作り」

##### <実施場所>

・第 1 回活動と同じ

##### <出席者>

第4回 参加者			
	大学生	子ども	
A	A1	あ1	
グル	E3	あ2	
ープ	A3	あ3	
	A4	あ4	
B	B1	い1	
グル	B2	い2	
ープ			
	B4	い4	
	大学生	子ども	
C	E1	う1	
グル	B3		
ープ	E4	う4	
D	D1		
グル	D2		
ープ	D3	お3	
* 司会等：C1,C2			
<出席者>			
大学生：合計 15名 子ども：合計10名			
ラボ関係者：4名			
その他出席者（FSスタッフ等）：6名			

\*A～Dの4つのグループに分けた。グループの中で、できるかぎり大学生と子どもが1対1で関われるようにした。

### ＜活動内容と狙い＞

・子どもが大学生にインタビューをして、iPad で紹介動画を作成する。また、編集アプリを使用して動画を編集する。そして、作成した紹介動画を、みんなに見てもらう。動画作成や編集作業が分からない子どもには、大学生が教える。こうしたことを通して、他者への関心を高める。

### ＜環境設定と狙い＞

・第1回活動と同じ。

### ＜安全対策＞

・第1回活動と同じ。

### ＜活動のタイムライン＞

●（14時30分）スタッフ集合＜全体打ち合わせ・準備＞～40分

・出席者：6名

・使用する物品の運搬

・会場の準備（机、イス、スクリーン、マイク、ノートパソコン等）

●（14時50分）正門に子どもをお迎えに行く（担当者・石井）

●（15時10分）はじめに（担当者・石井）～5分

・挨拶、本日の活動について、諸注意等

●（15時15分）活動①（司会 C1）～25分

・他者紹介動画作りと編集作業。

●（15時40分）休憩～5分

●（15時45分）活動②（司会 C1）～25分

・他の人が作った他者紹介動画を見る。

●（16時10分）インタビュー（担当者：石井）～5分

・子ども調査の実施（大学生が子どもにインタビューして入力か子ども自身が入力）

- (16時15分) おわりに (担当者: 石井) ~5分

・挨拶、次回の活動について、諸注意等

- (16時20分) 後片付け (担当者: 全員) ~25分

・会場の撤収

--- 子供、協力フリースクール帰宅 ---

- (16時45分) スタッフでの振り返り (担当者: 石井) ~10分

・本日の振り返り、次回の活動の確認等

### <該当回の活動内容に対する子供の反応・分析結果>

#### (1) 活動の楽しさ

子ども調査で「今日の活動は楽しかったですか？」(N=10)の項目で、「とても楽しかった」は90.0%、「少し楽しかった」は10.0%であった。第4回目の活動は、子どもたちにとって楽しいものであったことが分かった。

#### (2) 活動への感想・意見

子ども調査で「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」(N=10)の項目の回答をみてみよう。「自分で撮った動画を編集するのが楽しかったです」、「あんまりやらない形の動画編集ができて楽しかった」、「真面目な人とふざけている人がいて面白かったです」(注: 真面目な内容の動画を作る人と軽いノリの内容の動画を作る人の意味だと思われる)、「大学生が優しく教えてくれたので楽しく取り組めた」といった回答があった。なお、否定的な回答は「編集時間が短かった」のみであった。

このように、第4回目の活動は、iPadで紹介動画を作成し、編集アプリを使用して動画を編集する活動であった。iPadや編集アプリの使い方に慣れていない子どももいたので、そうした子どもたちには、大学生がやり方を教えた。活動中は、子どもたちが、いつも以上に盛り上がっている様子が見られ、とても楽しく活動していたと考えられる。

#### (3) 具体的な内容について

子ども調査で「友だちのよいところをもっと知りたいと思う」(N=10)の項目では、「とてもそう思う」は60.0%で、「わりとそう思う」は40.0%であった。動画作成を通して、他者への関心を高めたといえそうである。「わからないことは、先生や友だちに聞くことができると思う」(N=10)の項目では、「とてもそう思う」は20.0%で、「わりとそう思う」は70.0%で、「あまりそう思わない」は10.0%であった。動画撮影や編集作業を通して、他者との関わり方を学んでいたといえそうである。ちなみに、資料3-1にある「第4回活動文字起こしデータ」を見ると、子どもと大学生の会話は、とてもスムーズで、まるで同級生同士の友だちの会話のようでもある。

これらのことから、第 4 回目の活動で、大学生への関心を高め、大学生との交流を深めた様子がうかがえる。

#### <該当回の環境設定に対する子供の反応・分析結果>

子ども調査で「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嬉しかった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください（自由記述）」（N=10）の項目の回答をみてみよう。「話せて良かった」、「声をかけてくれた」、「いろんなことを褒めてもらえたのが嬉しかったです」、「優しく教えてくれたり、褒めてくれて嬉しかった」といった回答があった。次に「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嫌だった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください（自由記述）」（N=10）の項目では、「ない」という回答だけだった。

これらのことから、大学生パートナーが、子どもたちと共感的・肯定的に関わる事が出来ていたのではないかと推察できる。

#### <振り返り等による気づき>

FS との振り返りでは、活動自体への批判は無かった。今回は、iPad の機器等を使用する活動だったので、機器が上手く作動するか、使えない子どもはいないか不安な所があったが、全く問題なく終了できた。

#### <次回に向けた改善点>

なし。

#### <実際の様子>

各ペアごとに撮影



### 作成した動画をアプリを使いながら編集



### 作成した動画グループの中で共有



## 資料

資料 4-1：第 4 回活動文字起こしデータ

資料 4-2：第 4 回活動パワポ資料

## 第 5 回 12 月 2 日 水曜日 15:10-16:20】

### 各回の活動概要

#### <活動タイトル>

「多様な他者との出会い」

#### <実施場所>

・第 1 回活動と同じ。

#### <出席者>

第5回 参加者					
	大学生	子ども			
A	A1	あ1		B	E3
グル		あ2		グル	B2
ープ	C3	あ3		ープ	
	A4	あ4			い4
	大学生	子ども			
C	C1	う1		D	E1
グル	C2	う2		グル	E6
ープ		う4		ープ	お3
* 司会等：D1,B4,A2,E4,E7,D3					
<出席者>					
大学生：合計 15名 子ども：合計10名					
ラボ関係者：4名 ゲスト講師：6名					
その他出席者（FSスタッフ等）：6名					

\*A～Dの4つのグループに分けた。グループの中で、できるかぎり大学生と子どもが1対1で関われるよ

うにした。

#### <活動内容と狙い>

・第1回～第4回までは、大学生と交流することで、子どもの共感能力や社会力を向上させてきた。第5回活動では、大学生以外の多様な他者（赤ちゃん、障がい者、外国人、高齢者）と交流し、他者への関心を広げることを目的とする。

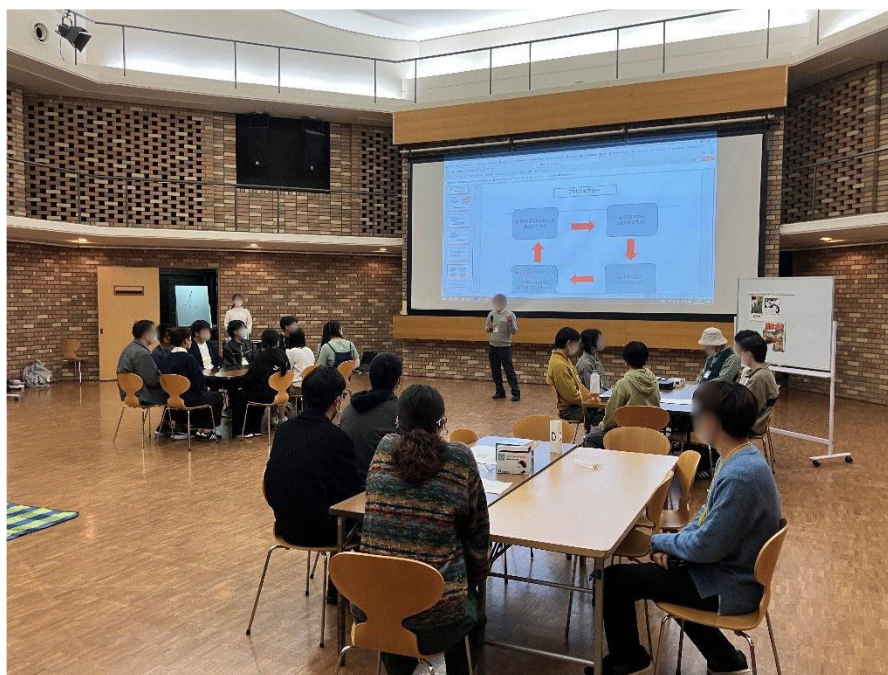
#### <環境設定と狙い>

・第1回活動と同じ。

#### <安全対策>

・第1回活動と同じ。

4つの場所を順番に回りながら、それぞれの場所にいる多様な他者と交流



#### <活動のタイムライン>

- （14時30分）スタッフ集合<全体打ち合わせ・準備> ～40分
- ・出席者：6名
- ・使用する物品の運搬

・会場の準備（机、イス、スクリーン、マイク、ノートパソコン等）

●（14時50分）正門に子どもをお迎えに行く（担当者・石井）

●（15時10分）はじめに（担当者・石井）～5分

・今回は、赤ちゃんや高齢者が参加するので、入り口で、手指消毒をしてもらう。マスクをしていない人にはマスクをもらう（大学生はマスクを持参する）。

・挨拶、本日の活動について、諸注意等

●（15時15分）活動（司会 D1）～55分

（1）多様な他者

・各グループに以下の者がいる。Aグループ：外国人（2名）。Bグループ：高齢者。Cグループ：赤ちゃんと母親と父親。Dグループ：障がい者（聴覚障がい者）。

（2）交流内容

①外国人の所：外国語のカルタで、外国人と子どもたちが遊ぶ。2-3分、質問タイムを設ける（日本に来て驚いたこと、日本と外国との違い等）。

②高齢者の所：「ピーナッツ人形作り」をする。高齢者の方が14個のピーナッツの殻を持って来る。それに、子どもたちが、サインペン等で、顔、鼻、口等を書き、完成させる。また、高齢者の方が、どんぐりのヘタも持参するので、それを帽子にする。2-3分、質問タイムを設ける（昔話や農業やヤギの話等）。

③赤ちゃんの所：床にレジャーシートをしき、長座布団に赤ちゃん（生後6ヶ月）を寝かせる。赤ちゃんのタオル遊びを見学&体験する。赤ちゃんを抱っこする。赤ちゃんの誕生直後の写真等を見る。妊娠・子育ての話。赤ちゃんと同じ重さの人形を抱っこする。4キロの鉄アレイが入ったリュックを前に背負い妊婦体験をする。2-3分、質問タイムを設ける（子育ての大変さの話等）。

④障がい者の所：iPadにUDトーク（音声を文字にするアプリ）をダウンロードし、それを使って聴覚障がいの方とコミュニケーションをとる。iPadに入っている「おしえてポン！」（アプリ）を使って、みんなでジエスチャー・ゲームをする。2-3分、質問タイムを設ける（困っていること、手話等）。

（3）進め方

・多様な他者の自己紹介&活動の説明（10分～15分）：D1

・自己紹介の後に、Aの所に外国人、Bの所に高齢者、Cの所に赤ちゃん、Dの所に障がい者がいく。

・活動①（10分）では、各グループの多様な他者と交流する。

・活動②（10分）では、Aグループの子どもと大学生はBの高齢者の所に行く。他のグループも次の所に行く。

・活動③（10分）では、Aグループの子どもと大学生は、Cの赤ちゃんの所に行く。他のグループも次の所に行く。

・活動④（10分）では、Aグループの子どもと大学生は、Dの障がい者の所に行く。他のグループも次の

所に行く。

- (16時10分) インタビュー (担当者: 石井) ~5分  
・子ども調査の実施 (大学生が子どもにインタビューして入力か子ども自身が入力)
  
- (16時15分) おわりに (担当者: 石井) ~5分  
・挨拶、次回の活動について、諸注意等
  
- (16時20分) 後片付け (担当者: 全員) ~25分  
・会場の撤収  
--- 子供、協力フリースクール帰宅 ---
  
- (16時45分) スタッフでの振り返り (担当者: 石井) ~10分  
・本日の振り返り、次回の活動の確認等

#### <該当回の活動内容に対する子供の反応・分析結果>

##### (1) 活動の楽しさ

子ども調査で「今日の活動は楽しかったですか？」(N=10)の項目で、「とても楽しかった」は90.0%、「少し楽しかった」は10.0%であった。第5回目の活動は、子どもたちにとって楽しいものであったことが分かった。

##### (2) 活動への感想・意見

子ども調査で「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」(N=10)の項目の回答をみてみよう。「アカチャン可愛い!!!」、「指文字を教えてください」、「色々な人達からお話を聞いてとても関心できました」、「いろんなことを学べて楽しかったです」、「多様な人と関わって、貴重な経験ができました」といった回答があった。なお、否定的な回答はなかった。

このように、第5回目の活動は、多様な他者と関わることで、様々な学びがあり、多様な他者へと関心を広げていった様子が見えてくる。

##### (3) 具体的な内容について

子ども調査で「友だちが困ったときには、助けることができると思う」(N=10)の項目では、「とてもそう思う」は20.0%で、「わりとそう思う」は60.0%で、「あまりそう思わない」は10.0%で「まったくそう思わない」は10.0%であった。「そう思う(「とても」と「わりと」の合計)」と回答した子どもは、8割に上った。多くの子どもが、多様な他者と関わることで、社会的弱者への理解等が進み、自分でも何か出来ることがあるのではないかという気持ちになったといえよう。「自分の未来は明るいと思う」(N=10)の項目では、「と

てもそう思う」は 20.0%で、「わりとそう思う」は 50.0%で、「あまりそう思わない」は 30.0%であった。「そう思う（「とても」と「わりと」の合計）」と回答した子どもは、7 割に上った。多くの子どもが、多様な他者と関わることで、ともに歩んでいくことが想像できるようになり、将来を明るく感じるようになったと考えられる。

これらのことから、第 5 回目の活動を通して、多様な他者にも関心が向くようになり、これからの生活に活かしていけるようになったといえよう。

#### **<該当回の環境設定に対する子供の反応・分析結果>**

子ども調査で「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嬉しかった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください（自由記述）」（N=10）の項目の回答をみてみよう。「話せて良かった」、「声をかけてくれた」、「いろんなことを褒めてもらえたのが嬉しかったです」、「優しく教えてくれたり、褒めてくれて嬉しかった」といった回答があった。次に「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嫌だった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください（自由記述）」（N=10）の項目では、「ない」という回答だけだった。

これらのことから、大学生パートナーが、子どもたちと共感的・肯定的に関わる事が出来ていたのではないかと推察できる。

#### **<振り返り等による気づき>**

FS との振り返りでは、第 5 回の活動に関して、良かったとの発言が多かった。今回は、ゲスト講師を多くお招きしていたので、様々な心配事があったが、無事に終了できた。なお、活動が終わってから、ある学生から、ピーナッツ人形作りの際に、ピーナッツ・アレルギーを持つ子どもがいて、本人の申し出により人形作りを行わなかったとの報告を受けた。今回の活動は飲食することはなかったため、子どものアレルギーに関しては、注意していなかったが、物を触るだけでも影響することがあると知り、アレルギーへの配慮をもっとすべきであったと反省させられる一件であった。

#### **<次回に向けた改善点>**

今後は、これまでと異なる特別な物品は使用しないか検討した。

なお余談であるが、活動終了後、高齢者のゲスト講師の方から、郷土の野菜を FS に送りたいという申し出があり、2 つの FS に豚汁セットを送った。

<実際の様子>

みんなでジェスチャーゲームをする様子



外国語カルタを使い、異文化交流



ピーナッツ人形作りをする様子



赤ちゃんとも交流し、特に盛り上がりを見せていた



## 資料

資料5：第5回パワポ資料（\*名前は黒塗りにしてください）

### 第6回 12月9日 火曜日 15:20-16:10】

#### 各回の活動概要

##### <活動タイトル>

「はたらかってなんだろう？ ～お金を稼(かせ)ぐだけじゃない、はたらくことの意味～」

##### <実施場所>

第1回活動と同じ

##### <出席者>

第6回 参加者							
	大学生	子ども			大学生	子ども	
A	A1	あ1		B	B1		
グル	E2	あ2		グル	B2		
ープ	E7	あ3		ープ			
	A4	あ4			B4		
	大学生	子ども			大学生	子ども	
C	C1	う1		D	D2		
グル	C2			グル			
ープ	C3	う4		ープ	D3	お3	
* 司会：F1      * 追加メンバー：E4,E6							
<出席者>							
大学生：合計 15名    子ども：合計7名							
ラボ関係者：4名							
その他出席者（FSスタッフ等）：6名							

\*A～Dの4つのグループに分けた。グループの中で、できるかぎり大学生と子どもが1対1で関われるよ

うにした。

### ＜活動内容と狙い＞

アニメ作品「魔女の宅急便」の一場面をみながら、登場人物のセリフに注目して、主人公のキキの気持ちを考える活動を前半と後半の2部構成で行った。活動の目的は、①他者の感情を想像する力を育む、②自分自身の感情理解を深める、③「はたらくこと」の意味を考えることを通してキャリア意識を高める、の3点である。

### ＜環境設定と狙い＞

・第1回活動と同じ。

・第6回の活動では、自己や他者の感情を扱うため、共感しやすいようにアニメ作品を用いることにした。また、対象となる子どもが小学校高学年～中学生であり、彼らに対して今回のテーマである「キャリア意識」の向上を促すため、同年代くらいの主人公がさまざまな人との出会いを通じて自己や他者と向き合い、自己理解を深めて、自分自身の生きかた（キャリア意識）が変化していく作品が適当であると考えた。これらの基準を満たす作品として、以下の6点が候補として挙げられた。これらの候補を繰り返し視聴し、ラボ内で検討した結果、以下の理由から、第6回に扱う作品は「魔女の宅急便」とすることが決まった。

#### ◎候補と採否理由

・「魔女の宅急便」

→ ストーリーがわかりやすく、子どもたちの実態に照らして取り上げたいセリフが最も多かった。また、他の作品と比べて「はたらく」ということをダイレクトにテーマにしていると考えられたため、第6回作品として採用することとした。

・「劇団四季 ファミリーミュージカル 魔法をすてたマジヨン」

→ ストーリーはわかりやすく、取り上げたいセリフも多かったが、もう少し低年齢層を対象とする方が良いこと、ミュージカルという特性上、歌が多いため限られた時間の中で実施するのが難しいと判断したため、不採用とした。

・「君たちはどう生きるか」

→ 内容については、今回考えさせたいことに最も近いものであったが、理解が難しい部分も多く、もう少し高年齢層を対象とする方が良いこと、1度見ただけではわからない部分が多いことなどから、不採用とした。

・「耳をすませば」

→ 内容についてわかりやすく、取り上げたいセリフも多く、年齢層としてもあっていると判断した。また、主人公が葛藤の中で学校の勉強を少し離れ、自分のやりたいことと向き合った結果、やりたいことをやるためにもっと学ぶ必要があることに気づくというストーリーで、今回のテーマに合っていると判

断し、第7回作品として採用する予定だったが、第6回活動実施後の検討を踏まえ、本作品は使用しない方向となった。

・「コクリコ坂から」

→ テーマは合っているが、難しい表現も多く、もう少し高年齢層を対象とする方が良く、舞台が「学校」であることを考慮し、不採用とした。

・「猫の恩返し」

→ 世界観がファンタジーにより過ぎているため、世界観を掴んだり気持ちを想像することが難しいのではないかと判断したため、不採用とした。

### <安全対策>

- ・第1回活動と同じ。

### <活動のタイムライン>

- (14時10分) スタッフ集合 <全体打合せ・準備> ~40分

出席者：7名

- ・会場の準備（机、イス、スクリーン、ノートパソコン等）

- (14時50分) 正門に子どもをお迎えに行く（担当者・石井）

- (15時15分) はじめに（担当者・日下）～5分

- ・活動の趣旨と流れを説明した。

- (15時20分) 実施内容①（担当者：F1）～20分

適宜動画を見せながら、以下の発問を行い、ワークシートに記入させた。

発問①：「ほかに何かおてつだいすること、ありませんか？」というセリフのときのキキはどんな気持ちだったかな？

狙い：登場人物の行動やセリフから内面の感情を読み取る。また、ある出来事に対して、複数の感情が同時に存在していることに気づく。

発問②：キキの「だってお金だけもらえないよ」というセリフにあなたは共感する？しない？なぜそう思うかも書いてみよう。

狙い：キキの価値観と自分自身の価値観を比較して、自分にとって「はたらくこと」がどのような意味を持つのかを考えさせる。

- (15時40分) ～ 休憩 5分

- (15時45分) 実施内容② (担当者：F1) 30分

前半と同様に実施。

発問③：「私ニシンのパイ嫌いなよね」というセリフを聞いたときのキキはどんな気持ちになったかな？  
あてはまるものすべてに○をつけてみよう！！

発問④：どうしてキキはあなたが○をつけた気持ちになったのかな？

狙い：はたらくことによって、必ずしもすべての人に感謝されるわけではないという経験をしたキキの感情を味わう。

発問⑤：孫にドアが開められたあと、自分がキキの立場だったらどんな気持ちになるかな？ 下の○に表情を書いてみよう。

狙い：言葉で表現することができない感情を、絵で表現する。

発問⑥：ロールプレイしてみよう！自分がキキだったら、このセリフの代わりに、孫になんて言ってもらえたら嬉しかったかな？

狙い：言葉の選び方によって相手の気持ちが変化することに気づかせる。

発問⑦：はたらくってなんだろう？ ～お金を稼(かせ)ぐだけじゃない、はたらくことの意味～ 自分の意見・思ったことを書いてみよう。

狙い：自分にとって「はたらくこと」がどのような意味をもつのかを考えさせる。

- (16時15分) インタビュー (担当者：日下) ～5分

- (16時20分) おわりに (担当者：日下) ～5分

・挨拶、次回の活動について、諸注意等

- (16時25分) 後片付け (担当者：全員) ～25分

・会場の撤収

--- 子供、協力フリースクール帰宅 ---

### <該当回の活動内容に対する子供の反応・分析結果>

#### (1) 活動の楽しさ

子ども調査で「今日の活動は楽しかったですか？」(N=7)の項目で、「とても楽しかった」は100%

であった。第6回目の活動は、子どもたちにとって楽しいものであったことが分かった。

### (2) 活動への感想・意見

子ども調査で「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」(N=7)の項目の回答をみてみよう。「考え方を共有できたり、働くことの意味を改めて知れた」、「自分と違う意見が聞けて良かった(原文ママ)」、「働くということを学べてよかったです」、「大学生と一緒に映画を見ながら主人公の気持ちを考えることが出来た」、「なかなかやらない事だったので新しく良かったです」「ハッピー」といった回答があった。

このように、第6回目の活動は、他者の感情を想像する力を育んだり、はたらくことの意義を考えるといった目的を達成することができたが様子が見えにくい。一方で、自分自身の感情理解を深めるという点は、自由記述からは効果を検証することができなかった。この点については、発問⑥「ロールプレイしてみよう！自分がキキだったら、このセリフの代わりに、孫になんて言ってもらえたら嬉しかったかな？」の活動に十分時間を取ることができなかったことが一因となっていると思われる。

### (3) 具体的な内容について

子ども調査で「友だちの気持ちを大切にすることができると思う」(N=7)の項目では、「とてもそう思う」は42.9%で、「わりとそう思う」は57.1%であり、すべての子どもが「そう思う(「とても」と「わりと」の合計)」と回答した。他者の気持ちを想像し、大切にしようという態度が育まれたのではないかと考える。「働いている人はどのようにして、その職業についたのかを知りたいと思う」(N=7)の項目では、「とてもそう思う」は57.1%で、「わりとそう思う」は42.9%であり、すべての子どもが「そう思う(「とても」と「わりと」の合計)」と回答した。また、全8回中7回以上参加した子どものキャリア意識質問票の平均得点について、第5回(前回)と比較して、すべての下位項目(人間関係形成力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力)の得点が上昇しており、多くの子どものキャリア意識が高まったことが窺える。「自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う」(N=7)の項目では、「とてもそう思う」が28.6%、「わりとそう思う」は28.6%であり、「あまりそう思わない」と回答した子どもは42.9%であった。自分自身の感情理解とともに感情表現の部分まで含めた質問項目であったため、このような結果になったものと思われる。

これらのことから、第6回目の活動を通して、他者の感情理解やキャリア意識の向上につながったといえよう。

### <該当回の環境設定に対する子供の反応・分析結果>

子ども調査で「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて"嬉しかった"関わり、言葉掛けがあったら教えてください(自由記述)」(N=7)の項目の回答をみてみよう。「話かけてくれて嬉しかったです」、「全部」、「いろいろなお話ができて嬉しかったです」、「話してくれた」、「たくさん発言する機会があったけど大学生がいたおかげで発言しやすかった」といった回答があった。次に「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて"嫌だった"関わり、言葉掛けがあったら教えてください(自由記述)」(N=7)の項目で

は、すべての子どもが「ない」回答であった。

これらのことから、大学生パートナーが、子どもたちと共感的・肯定的に関わることが出来ていたのではないかと推察できる。

#### <振り返り等による気づき>

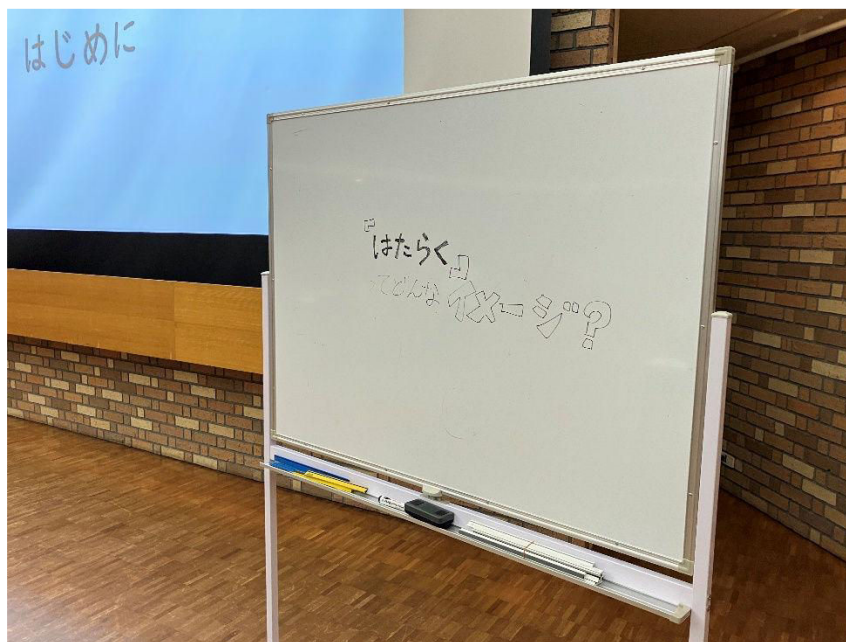
FSとの振り返りでは、第6回の活動に関して、おおむね肯定的な意見が上がった。取り上げた作品について、見たことがない子どもがほとんどであったため、切り取った部分の前後の文脈についてももう少し丁寧に説明した方が良かったのではないかという意見が上がった。進行に関しても、ファシリテートの方法を特に指定していなかったため、自由に話させるスタイルと順番に話をするスタイルの両方のグループが混在した。どちらにも良さがあるため、子どもの実態に合わせて選択するのが良いのではないかと考える。また、はたらくということについて考える際、パートナーとなっている大学生が自身のアルバイト経験を踏まえて語る場面があり、それが子どもの理解を促進している可能性が窺えた。FSの活動に取り入れる際にも、大人がファシリテーターとして参加することが有効である可能性が窺える。

#### <次回に向けた改善点>

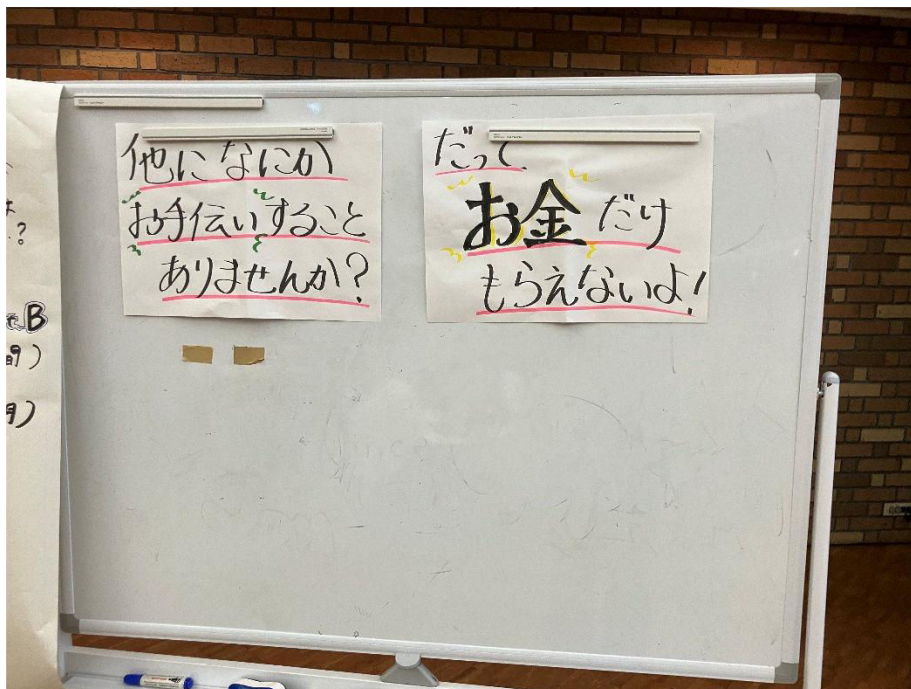
作品の前後関係の説明も含めて丁寧にを行う必要があり、新たな作品を取り上げるのではなく、今回と同じ作品を使用するのが良いと考えられた。

#### <実際の様子>

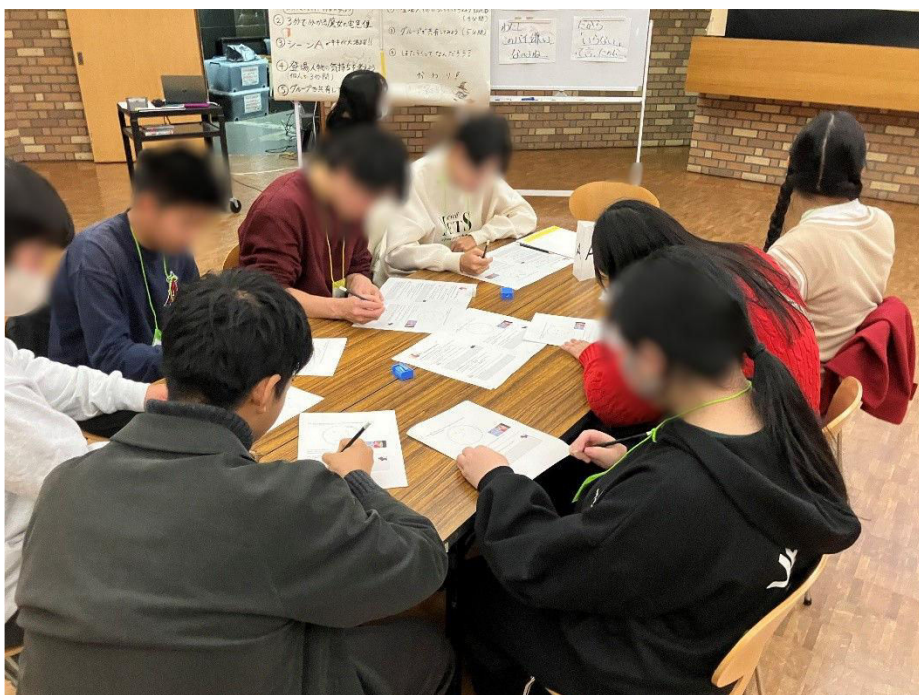
アニメ映画を見ながら「はたらく」について考える



映画の一場面を見ながら、登場人物のセリフに注目しながら考える



一場面を見たらワークシートへ感想などを各自記入



## 資料

資料6 第6回ワークシート

### **第7回 12月16日 火曜日 15:20-16:10】**

#### 各回の活動概要

##### <活動タイトル>

「魔女の宅急便×「仕事とじぶん」」

##### <実施場所>

・第1回活動と同じ

##### <出席者>

第7回 参加者			
	大学生	子ども	
A	A1	あ1	
グル	E3	あ2	
ープ	A3	あ3	
	A4	あ4	
B	B1		
グル	E6	い2	
ープ	B3		
	B4		
	大学生	子ども	
C	C1	う1	
グル	C2	う2	
ープ	C3	う4	
	大学生	子ども	
D	D1		
グル	D2		
ープ	D3	お3	
* 司会：F2      * 追加メンバー：E4,E5,E7			
<出席者>			
大学生：合計 18名    子ども：合計9名			
ラボ関係者：4名			
その他出席者（FSスタッフ等）：6名			

\*A～Dの4つのグループに分けた。グループの中で、できるかぎり大学生と子どもが1対1で関われるよ

うにした。

### <活動内容と狙い>

アニメ作品「魔女の宅急便」の一場面をみながら、登場人物のセリフに注目して、主人公のキキの気持ちを考える活動を前半と後半の2部構成で行った。活動の目的は、①他者の感情を想像する力を育む、②自分自身の感情理解を深める、③「はたらくこと」の意味を考えることを通してキャリア意識を高める、の3点である。

### <環境設定と狙い>

- ・第6回活動と同じ。
- ・第6回からの変更点として、当初は「耳をすませば」を取り扱うことも視野にあったが、第6回の活動の振り返りや実施してみたの反省を踏まえて、新たな作品を取り扱うことを取りやめ、「魔女の宅急便」を引き続き扱うこととした。

### <安全対策>

- ・第1回活動と同じ。

### <活動のタイムライン>

- (14時10分) スタッフ集合 <全体打合せ・準備> ~40分

出席者：7名

- ・会場の準備（机、イス、スクリーン、ノートパソコン等）

- (14時50分) 正門に子どもをお迎えに行く（担当者・石井）

- (15時15分) はじめに（担当者・日下）～5分

- ・活動の趣旨と流れを説明した。

- (15時20分) 実施内容①（担当者：F2）～20分

適宜動画を見せながら、以下の発問を行い、ワークシートに記入させた。

発問④：キキに対して「才能を生かした仕事だろう。素敵だよ。」といったトンボにどれくらい共感する？

あてはまるのに○をつけてみよう！なぜそう思うかも書いてみよう！

狙い：登場人物の行動やセリフから内面の感情を読み取る。また、ある出来事に対して、複数の感情が同時に存在していることに気づく。

発問②：トンボは“空を飛ぶ”という事に対して、好きが○%で得意が○%だと思う？下の図に印を

つけてみよう！ ( ) に好きと得意、それぞれ何%かも書いてみよう！  
狙い：「好き」と「得意」の軸があるということに気づかせる。

● (15時40分)～休憩 5分

● (15時45分) 実施内容② (担当者：F2) 30分

前半と同様に実施。

発問③：ウルスラとキキがいう「血」って自分だったら何に当てはまるかな？小さい時から好きなことや、マイブーム、ずっと続けたいことを書いてみよう。

狙い：過去を振り返って、自分の得意なことや好きなことを整理し、自己理解を深める。

発問④：あなたは、トンボ、キキ、ウルスラのどのタイプでしょうか？「トンボ：好きなことをとことんやりたい」「キキ：得意なことを人のために役立てたい」「ウルスラ：自分のペースで時には休みたい」

狙い：職業選択や、生き方の選択といったキャリア意識の向上を促す。

● (16時15分) インタビュー (担当者：日下) ～5分

● (16時20分) おわりに (担当者：日下) ～5分

・挨拶、次回の活動について、諸注意等

● (16時25分) 後片付け (担当者：全員) ～25分

・会場の撤収

--- 子供、協力フリースクール帰宅 ---

### <該当回の活動内容に対する子供の反応・分析結果>

#### (1) 活動の楽しさ

子ども調査で「今日の活動は楽しかったですか？」(N=9)の項目で、「とても楽しかった」は77.8%、「少し楽しかった」は11.1%、「あまり楽しくなかった」は11.1%であり、第7回目の活動は、多くの子どもたちにとって楽しいものであったことが分かった。

#### (2) 活動への感想・意見

子ども調査で「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」(N=9)の項目の回答をみてみよう。「キャラそれぞれに個性がありとても面白かった」、「ジブリが面白かったです」、「いろんなことを学べて楽しかったです」、「結構考えさせられる内容だった」、「映画を見て共感出来る部分を共有でき

て楽しかった」「動画を見るのが楽しかった」「今日は国語の授業みたいだった」「エモい」「楽しかった」といった回答があった。

このように、第7回目の活動は、他者の感情を想像する力を育んだり、自分にとってはたらくことの意義を考えるといった目的を達成することができた様子が見えてくる。一方で、取り上げる内容が難しく、退屈に感じてしまった子どもがいた様子も窺えた。「主人公の気持ち」に焦点を当てるのは正解を導くためではなく、作品を深く味わい自分自身の気持ちと重ね合わせてもらうことにあったが、発問やワークシートといった活動のスタイルが授業のようなやりとりになってしまったことが原因として考えられる。

### (3) 具体的な内容について

子ども調査で「友だちの気持ちを大切にすることができると思う」(N=9)の項目では、「とてもそう思う」は44.4%で、「わりとそう思う」は33.3%であり、参加した子どもの77.8%が「そう思う(「とても」と「わりと」の合計)」と回答した。他者の気持ちを想像し、大切にしようという態度が育まれたのではないかと考える。

「働いている人はどのようにして、その職業についたのかを知りたいと思う」(N=9)の項目では、「とてもそう思う」は44.4%で、「わりとそう思う」は44.4%であり、参加した子どもの88.9%が「そう思う(「とても」と「わりと」の合計)」と回答した。また、全8回中7回以上参加した子どものキャリア意識質問票の平均得点について、将来設計能力の得点が上昇(全8回中最高)しており、多くの子どもにとって、自分自身の将来について考える機会となった様子が窺える。

「自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う」(N=9)の項目では、「とてもそう思う」が33.3%、「わりとそう思う」は22.2%であり、「あまりそう思わない」と回答した子どもは44.4%であり、この点については結果が2分することとなった。第6回と同様、自分自身の感情理解とともに感情表現の部分まで含めた質問項目であったため、このような結果になったものと思われる。

これらのことから、第7回目の活動を通して、他者の感情理解やキャリア意識の向上につながったといえよう。

### <該当回の環境設定に対する子供の反応・分析結果>

子ども調査で「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嬉しかった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください(自由記述)」(N=9)の項目の回答をみてみよう。「自分の意見を真剣に聞いてくれたこと」、「話し掛けてくれた」、「いろいろ話せて嬉しかったです」、「たくさん話すことができるとても良い人だと思った」、「声掛けてくれた」「全部」といった回答があった。次に「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嫌だった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください(自由記述)」(N=9)の項目では、すべての子どもが「ない」回答であった。

これらのことから、大学生パートナーが、子どもたちと共感的・肯定的に関わる事が出来ていたのではないかと推察できる。

### <振り返り等による気づき>

FS との振り返りでは、第7回の活動に関して、おおむね肯定的な意見が上がった。国語の授業っぽかったという感想にもあるように、プリントや内容が授業のようで苦手意識を持つ子どもがいたことが反省としてあげられた。したがって、FSで実施するには、子どもの実態に合わせてプリントなどを用いずに、フリーの座談会のような形で実施することも検討すべきではないかと考える。また、FSの活動のキャリア・カウンセリングに参考になったとの報告がなされた。

### <次回に向けた改善点>

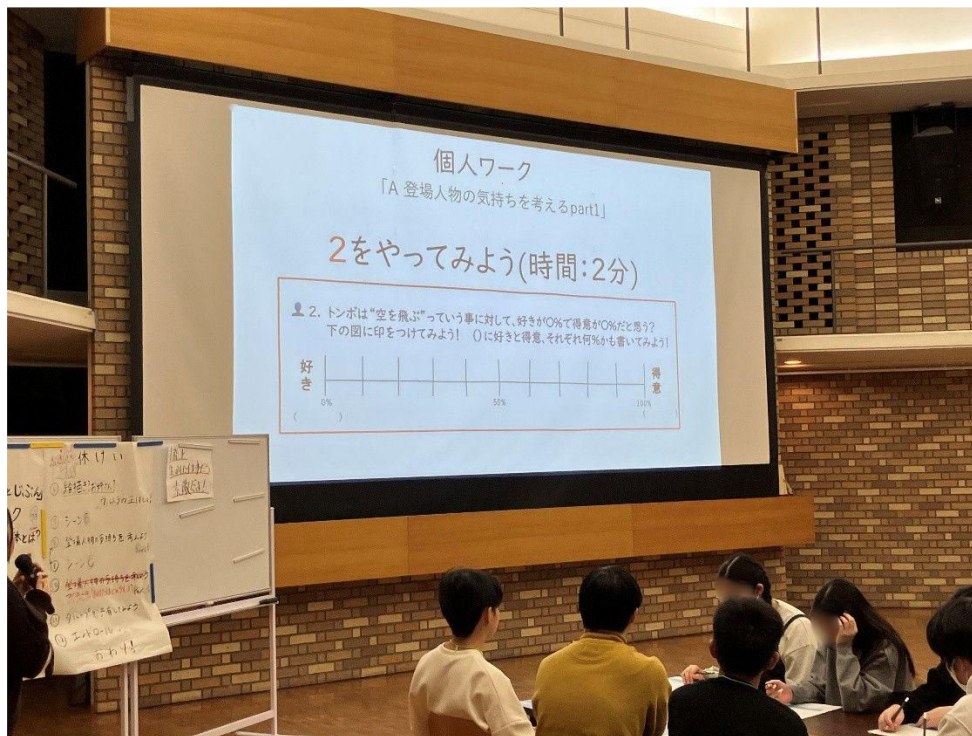
授業のような印象を減らすため、言葉でのやり取りを多くする。

### <実際の様子>

前方のスクリーンを使って、全員で映画の場면을視聴する様子



## 第6回同様、個人ワークを実施



## 個人ワーク後は、グループ内で共有



**資料**

資料7 第7回ワークシート

**第8回 12月23日 火曜日 15:20-16:10】**

**各回の活動概要**

**<活動タイトル>**

「大学生のことを知ろう②」

**<実施場所>**

・第1回活動と同じ

**<出席者>**

第8回 参加者					
	大学生	子ども			
A	A1	あ1		B	E5
グル	A2	あ2		グル	E1
ープ		あ3		ープ	E7
	A4				E3
	大学生	子ども			大学生
C	C1	う1		D	D1
グル		う2		グル	D2
ープ	C3	う4		ープ	D3
* 司会等：B2,B3,B4,E4 * 追加メンバー：E2,E6					
<出席者>					
大学生：合計 18名 子ども：合計8名					
ラボ関係者：4名 ゲスト講師：2名					
その他出席者（FSスタッフ等）：6名					

\*A～Dの4つのグループに分けた。グループの中で、できるかぎり大学生と子どもが1対1で関われるよ

うにした。

### ＜活動内容と狙い＞

4人の4年生等に、大学時代に経験したこと、自分の専門分野（ゼミ）、卒論、就職先等について発表してもらおう。それを通して、子どもに、自分が経験したいこと、知りたいと思った専門分野（ゼミ）、気に入った将来の夢等を考えてもらおう。→子どもが、自分の将来について考えるきっかけとする（キャリア意識の向上を育成する）。

### ＜環境設定と狙い＞

・第1回活動と同じ。

### ＜安全対策＞

・第1回活動と同じ。

### ＜活動のタイムライン＞

#### ● (14時10分) スタッフ集合 <全体打合せ・準備> ~40分

出席者：8名

・会場の準備（机、イス、スクリーン、ノートパソコン等）

● (14時50分) 正門に子どもをお迎えに行く（担当者・石井）

● (15時10分) はじめに（担当者・石井）～5分

・活動の趣旨と流れを説明した。

● (15時15分) 実施内容①（担当者：B2、B3）～25分

(1) 発表者

・主に学生生活の発表：  さん（演劇、旅行等）、  さん（不登校支援サークルの立ち上げ）

・主に留学関係の発表：B4さん（ドイツ）、E4さん（ヨルダン）

(2) 発表内容

・「大学生のことを知ろう②大学生の発表を聞き、知りたい専門分野を選ぶ」。12分程度の持ち時間で、パワーポイント等を使って簡単な発表（8分）、質疑応答&感想シートへの記入

(4分) をしてもらおう。

- ① 学生生活関係：どのような活動を行ったか得られたものは何か。学科（ゼミ）の紹介。卒論の紹介。就職先等。
- ② 留学関係：どこに留学してどのような経験をしたか。学科（ゼミ）の紹介。卒論の紹介。就職先等。

### (3) 活動の進め方

- ・活動前半①：A&B グループは、前方のスクリーンを見ながら、          さんの発表を見る（8分）。質疑応答（2分）。子どもは感想シートへ記入（2分）。
- ・活動前半①：C&D グループは、後方のスクリーンを見ながら、B4さんの発表を見る（8分）。質疑応答（2分）。子どもは感想シートへ記入（2分）。
  
- ・活動前半②：A&B グループは、前方のスクリーンを見ながら、          さんの発表を見る（8分）。質疑応答（2分）。子どもは感想シートへ記入（2分）。
- ・活動前半②：C&Dグループは、後方のスクリーンを見ながら、E4さんの発表を見る（8分）。質疑応答（2分）。子どもは感想シートへ記入（2分）。

- (15時40分) ～ 休憩 5分
  
- (15時45分) 実施内容②（担当者：B2、B3） ～25分  
子どもを入れ替えて、前半と同様に実施。
  
- (16時10分) インタビュー（担当者：石井） ～5分
  
- (16時15分) おわりに（担当者：石井） ～5分

・挨拶、次回の活動について、諸注意等

- (16時20分) 後片付け（担当者：全員） ～25分
- ・会場の撤収

--- 子供、協力フリースクール帰宅 ---

### <該当回の活動内容に対する子供の反応・分析結果>

#### (1) 活動の楽しさ

子ども調査で「今日の活動は楽しかったですか？」(N=8)の項目で、「とても楽しかった」は87.5%、

「少し楽しかった」は 12,5%であり、第 7 回目の活動は、すべての子どもたちにとって楽しいものであったことが分かった。

## (2) 活動への感想・意見

子ども調査で「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」(N=8)の項目の回答をみてみよう。「大学生の事を知れて面白かったです」、「大学生の発表が面白かった」、「大学生が経験したことを聞けてとても良い経験になりました」、「色々な大学生と関わって面白かった」、「大学生の話がとても興味深く面白かった」、「大学生のたくさんのお話を聞けて嬉しかったです」、「とても勉強になりました」、「八週間楽しかったですありがとうございました」といった回答があった。

このように、第 8 回目の活動は、大学生活について知り、大学生活に対して興味を持つことができた様子がうかがえる。

## (3) 具体的な内容について

子ども調査で「高校や大学、専門学校ではどんな勉強するのかを知りたいと思う」(N=8)の項目では、「とてもそう思う」は 62.5%で、「わりとそう思う」は 25.0%であり、参加した子どもの 87.5%が「そう思う（「とても」と「わりと」の合計）」と回答した。参加したほとんどの子どもにとって、進学先での学びへの興味が向上した様子が窺える。

「すぐにできなくても、できるまでがんばろうと思う」(N=8)の項目では、「とてもそう思う」は 25.0%で、「わりとそう思う」は 75.0%であり、参加した子どものすべてが「そう思う（「とても」と「わりと」の合計）」と回答した。また、「難しいことでも、やる気になったら、できると思う」(N=8)の項目では、「とてもそう思う」は 62.5%で、「わりとそう思う」は 37.5%であり、参加した子どものすべてが「そう思う（「とても」と「わりと」の合計）」と回答した。これは、参加した子どもの「目標に向かって粘り強く取り組む意欲」が高く、取り組んだ結果目標を達成することができるという「自己効力感」が高いことを表している。今回の活動が子供達の意欲向上と自己効力感向上に少なからず寄与しているのではないかと考える。また、全 8 回中 7 回位以上参加した子どものキャリア意識質問票の平均得点について、人間関係形成能力と情報活用能力の得点がともに上昇（全 8 回中最高）し、キャリア意識全体の合計得点も全 8 回中最高得点となっており、多くの子どもにとって、キャリア意識が向上する機会となった様子が窺える。

これらのことから、第 8 回目の活動を通して、キャリア意識の向上につながったといえよう。

## <該当回の環境設定に対する子供の反応・分析結果>

子ども調査で「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嬉しかった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください（自由記述）」(N=8)の項目の回答をみてみよう。「漢字を教えてくれた」、「自分の意見に共感してくれたこと」、「毎回気軽に話しかけてくれてとても嬉しかった」、「たくさんお話しできて嬉しかったです」、「質問の提案をしてくれた」といった回答があった。次に「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嫌だった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください（自由記述）」(N=8)の項目では、すべての子どもが「ない」回答であった。

これらのことから、大学生パートナーが、子どもたちと共感的・肯定的に関わることが出来ていたのではないかと推察できる。

### <振り返り等による気づき>

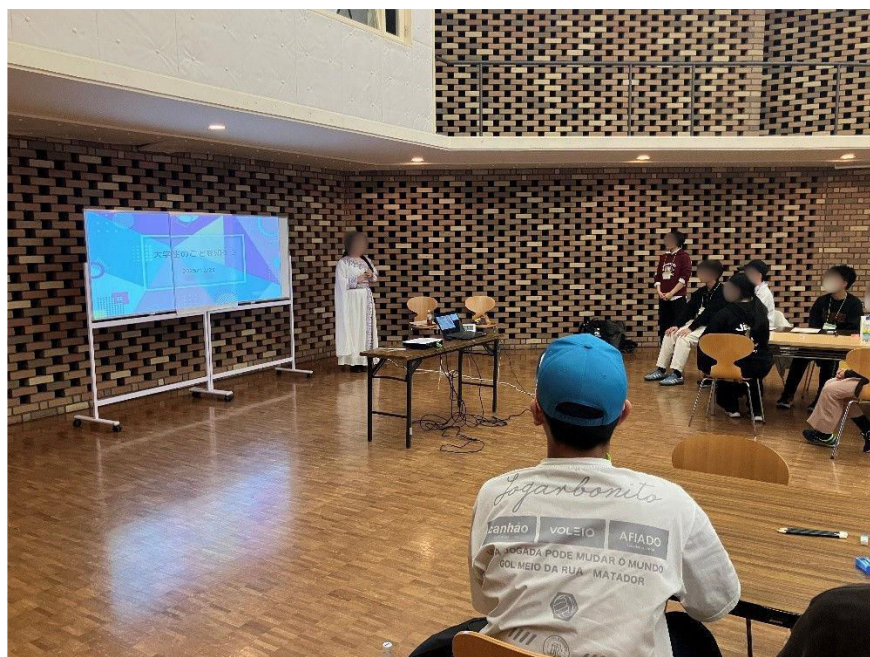
FS との振り返りでは、第8回の活動に関して、おおむね肯定的な意見が上がった。全体の中で第8回が最も好評だったという報告がなされた。書くのが苦手な子供も、一生懸命に感想シートを書いており、子どもたちの関心の高さが窺えた。また、不登校経験のある学生からの発表もあり、自分たちの具体的なキャリアイメージを持つことができたことも良かったと感じているようだった。

### <実際の様子>

趣味や日頃の活動まで幅広く大学生からの発表が行われた



ヨルダンでの留学経験を話す様子



ドイツでの留学経験について話す様子



質疑応答の時間では、子供たちから大学生への質問も数多くされた



最後は大学生が花道を作り、和やかな雰囲気ですべての活動が終了



## 資料

資料8：プレゼン資料（W）一部

### <補足>

今回の不登校支援プログラムの計画には無かったが、子どもが大学の正門からアートホールに行くまでの間に、何回か大学案内ツアーを行った（10分～15分程度）。始めた経緯は、以下の通りである。第1回活動の際、大学の正門に子どもたちを迎えに行った。子どもたちは、時間より早めに到着した。正門は白金キャンパスの西の端にあり、アートホールは東の端にある。時間に余裕があったので、白金キャンパスの西から東に歩いていく際に、以前、高校生に実施した大学案内ツアーのように、チャペルやヘボン像等の説明を子どもたちに行った。すると、私の説明を、子どもたちは目を輝かせて聞いていた。もしかしたら、子どもたちは喜んでいるのではないかと思ひ込み、その後も大学案内ツアーを実施した（キャリア意識の向上の一助になるかもしれないので）。具体的な大学案内ツアー内容は以下の通りである。

第1回：チャペル、ヘボン像等

第3回：多目的ルーム、石井研究室

第4回：大教室、部室棟

第6回：歴史資料館、小チャペル

第7回：インプリー館

第8回：図書館

## 第3章 子供の特性と変化の分析

### 第1節 活動全体を通じた変化・特性に応じた支援方法等における検証内容と仮説

この節では、主に以下の2つの変化について分析、考察する。

- ① 子どもの他者への関心、共感能力の向上（社会力の育成）
- ② 学びの動機づけを高める（キャリア意識の変化）

8回の活動を通して、①と②の能力が高まると予想される。

なお、8回の活動を通しての変化を分析するため、7回以上参加した子どもを対象（8名）とし、分析を行う。

次に、「特性に応じた支援方法」に関しては、大学生が、子どもたちに、どのような形で共感的・肯定的に関わっていたのかを分析、考察する。大学生が、共感的・肯定的に関わることで、子どもたちの満足感が高まったり、活動の中に社会的居場所を確保できたりすると予想される。

#### 【キャリア意識の変化について】

8回の活動を通じて、キャリア意識（人間関係形成力：他者理解・自己理解・コミュニケーション、情報活用能力：情報収集・職業理解、将来設計能力：計画実行能力・役割把握能力、意思決定能力）が向上することを目指した活動をおこなった。具体的には、第1回～第5回まで他者理解を深める活動を、第6回～第7回では自己理解を深める活動を、第8回では将来のことを考える情報活用能力を高める活動を中心に行なった。全8回中7回以上参加した子どもの変化（後述する「キャリア意識質問票」の得点）について、資料9にまとめた。資料9によると、多少の上下はあるものの第1回から第8回につれてキャリア意識得点が増加したことが明らかとなった。下位項目の得点については、将来設計能力得点のみ第8回で低下したが、その他はいずれも活動が進むにつれて増加したことがわかる。

また、第8回の活動の振り返りや活動終了後の自由記述の内容からも、キャリア意識が向上したことがわかる記述が散見され、活動全体を通じた「キャリア意識」の変化についての仮説が一定程度支持されたことがうかがえる。

### 第2節 活動全体を通じた変化・特性に応じた支援方法等における記録方法

以下の記録を分析対象とする。

- ① 各回の子どもの振り返り
- ② 活動全体の子どもの振り返り
- ③ 第8回のワーク・シート
- ④ その他（FSとの振り返りデータ等）

#### 【キャリア意識の変化について】

キャリア意識の変化を分析するツールとしては、「キャリア意識質問票」、「参加者の振り返り自由記述」の2点である。「キャリア意識質問票」は、新見（2008）の「中学生版キャリア意識尺度」をもとに作成

した。作成にあたっては、主成分分析の因子寄与率を参考にしながら、参加者の負担を最小限にするために各因子5項目ずつ合計20項目の質問を抽出した。さらに、参加者の実態を踏まえて質問文に適宜修正を加えた。なお、この一連の作業はラボの中の複数の教員により行われた。

〈参考文献〉

新見直子（2008）中学生版キャリア意識尺度の開発。広島大学大学院教育学研究科紀要 第3部, 57: 225-233.

### 第3節 活動全体を通じた変化・特性に応じた支援方法等における分析ツール・手法

上記の記録に関して、質的分析及び量的分析を行い、総合的に考察する。

### 第4節 個別の子どもの分析

「活動全体のふりかえり」の「参加した活動全体をふりかえて、どれくらい満足していますか」の項目では、8名の子どもは全員「とても満足した」と回答した。

#### 4-1. あ1の変化について 中学生

(0) 子どもの特性（ヒアリングシートの「備考」及び「その他特記事項」より転記）

・学校や、所属していた野球チームでの厳しい指導から、人間不信に陥った過去がある。追記：活動への不安もなし。

・今回のリーダー的な立ち位置。色々やらせてあげてみて欲しい。

(1) 全体的な傾向

表あ1-1 あ1（〇、●、T、7回）の各回の感想等

	今日の活動は楽しかったか	今日の活動の感想等も記入	今日の活動で大学生にされて“嬉しかった”関わり等も記入	今日の活動で大学生にされて“嫌だった”関わり等も記入
第1回活動（大学生のことも知ろう①）	とても楽しかった	大学について少し知ることができたと思う	みんな優しくてすぐ馴染むことができた	特になし
第2回活動（ポッチャ&モルック体験）	とても楽しかった	スポーツを通じて楽しく大学生と関わることができたと思う	とても優しく喋りやすかった	特になし
第4回活動（他者紹介動画作り）	とても楽しかった	大学生が優しく教えてくれたので楽しく取り組めた。	優しく教えてくれたり、褒めてくれて嬉しかった。	特になし
第5回活動（多様な他者との出会い）	とても楽しかった	色んな人と楽しく関わる事ができたと思う	発言する時に背中を押してくれた	特になし
第6回活動（ジブリ映画からの気持ち探し①）	とても楽しかった	大学生と一緒に映画を見ながら主人公の気持ちを考えてることが出来た	たくさん発言する機会があったけど大学生がいたおかげで発言しやすかった	特になし
第7回活動（ジブリ映画からの気持ち探し②）	とても楽しかった	映画を見て共感出来る部分を共有できて楽しかった	たくさん話すことができてとても良い人だと思った	特になし
第8回活動（大学生のことも知ろう②）	とても楽しかった	大学生の話がとても興味深くて面白かった	毎回気軽に話しかけてくれてとても嬉しかった	特になし

(表あ 1-1 より)「今日の活動は楽しかったか」の項目で、第 1 回から第 8 回まで「とても楽しかった」と回答している。初回から最後まで、特に大きな問題はなく、あ 1 にとって有意義な活動であったといえよう。

(表あ 1-1 より)「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」の項目では、「大学について少し知ることができたと思う」、「スポーツを通じて楽しく大学生と関わることができたと思う」等の回答から、第 1 回から第 8 回まで、各回の目的に沿うような形で活動を行い、満足している様子がうかがえる。

前述したように「活動全体のふりかえり」の「参加した活動全体をふりかえって、どれくらい満足していますか」の項目では、上記のことを裏付けるように、「とても満足した」と回答している。

(表あ 1-2 より)「参加した活動全体をふりかえって、良かったと思う点を教えてください」の項目では、「大学の施設を細かく見せていただいて将来の不安を少し取り除くことができた。自分は想像すると、ネガティブなイメージを膨らませてしまうので、実際に見学することができて、とてもいい経験になった」と回答している。全 8 回の活動はもちろんのこと、活動前の大学案内ツアーも、あ 1 にとって有意義な経験であったことが明らかになった。

## (2) 社会力の育成について

(図あ 1-1 より) 第 1 回から第 8 回まで、社会力の根底にある「人間関係形成力」が多少上昇していることがうかがえる(第 1 回は 15 ポイント、第 8 回は 17 ポイント)。他者への関心や共感能力がある程度身についたといえそうである。

## (3) キャリア意識向上について

キャリア意識得点の変化(図あ 1-5)をみると、キャリア意識得点が第 1 回(62 ポイント)から第 8 回(71 ポイント)にかけて 9 ポイント上昇したことがわかる。特に、第 2 回、第 5 回、第 6 回の活動参加後にキャリア意識得点が 2 ポイント以上上昇している。下位項目をみると、第 1 回から第 2 回にかけて人間関係形成力(15 ポイント→16 ポイント)、情報活用能力(15 ポイント→17 ポイント)、意思決定能力(15 ポイント→17 ポイント)がそれぞれ上昇した。また、第 5 回から第 6 回にかけて意思決定能力が 2 ポイント上昇した。以上のことから、本プログラムの参加を通じて「あ 1」のキャリア意識が向上したことがうかがえる。各回の振り返りの記述(表あ 1-1)では、大学生をはじめとした他者との関わりやサポートがあったことの良さが記述されており、あ 1 の変化の背景には「大人との温かい人間関係」があったのではないかと推測される。

## (4) その他(活動全体を通じて効果的だった支援方法、活動全体を通じて効果的だった環境設定等)

あ 1 は、(表あ 1-1 より) 8 回の活動すべてで「とても楽しかった」と回答し、活動全体の振り返りでも「とても満足した」と回答している。そうした点で、大学生の共感的・肯定的な関りの中で、あ 1 は、社会

的居場所を確保していたと考えられる。

(表あ 1-1 より)「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嬉しかった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「みんな優しくてすぐ馴染むことができた」、「とても優しく喋りやすかった」等と回答している。したがって、あ 1 にとっては、「優しく」接してもらうことが、嬉しい関わりだといえる。また、「褒めてくれる」、「発言するときに背中を教えてくれる」、「気楽に話かけてくれる」といった関わりも、有効であると考えられる。なお、「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嫌だった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「なし」の回答であった。

(大学生への事後調査から) あ 1 と多くかかわった大学生から以下の記述があった。①その子どもと関わる際に意識したこと：野球が同じ共通の趣味であったので、それをメインに話をしていた。あとは 1 日の生活で、何時に寝たのかなど、日常生活に関係するようなところをメインに話すことを意識した。②その子どもに有効だと思う関わり：上記と重なってしまうが、積極的に私(大学生)から話すことで距離は縮まったのかなと思う。③うまくいかなかった関わり：とくにないと思います。④その子どもの変化：素直な子だった。他者と関わることに距離を置いていたと思いますが、大学生と関わることで彼なりに新たな発見や知見を持つことができたのではないかと思う。

#### 4-2. あ 2 の変化について 中学生

(0) 子どもの特性 (ヒアリングシートの「備考」及び「その他特記事項」より転記)

- ・ずっと座っていたり、急に話し出しちゃうことはある。自身を「〇〇ちゃん」と呼ぶ。自ら SNS の交換を迫ることがあるので、その点は注意は必要かも (特に学生に対して、など)
- ・過剰なスキンシップが見られた場合の接し方 (SNS の交換) については、「ごめんね、難しい (仕組みとして)」というような断り方をする。「そういう風にはいけない」としっかり伝えていただく (本人も納得する)。話をすれば冷静に受けてくれる。

##### (1) 全体的な傾向

表あ2-1 あ2 ( 〇、 〇、 A、 7回 ) の各国の感想等

	今日の活動は楽しかったですか？	今日の活動の感想等も記入	今日の活動で大学生にされて "嬉しかった" 関わり等も記入	今日の活動で大学生にされて "嫌だった" 関わり等も記入
第1回活動 (大学生のことも知ろう①)	とても楽しかった	クソ楽しかった	やっぱキワールかな	ないですもん
第2回活動 (ポッチャ&モルック体験)	とても楽しかった	ロービールでこなさきよがった楽しかった	苗字一緒なの？	ない
第4回活動 (他者紹介動画作り)	とても楽しかった	楽しかった	ギア2	ない
第5回活動 (多様な他者との出会い)	とても楽しかった	アカチャン可愛い!!	Qrio	ない
第6回活動 (ジブリ映画からの気持ち探し①)	とても楽しかった	ハッピー	ない	ない
第7回活動 (ジブリ映画からの気持ち探し②)	とても楽しかった	エモい	それな	ない
第8回活動 (大学生のことも知ろう②)	とても楽しかった	八週間楽しかったですありがとございました	ウィー	ない

(表あ 2-1 より)「今日の活動は楽しかったか」の項目で、第 1 回から第 8 回まで「とても楽しかった」と回答している。初回から最後まで、特に大きな問題はなく、あ 2 にとって有意義な活動であったといえよう。

(表あ 2-1 より)「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」の項目では、「楽しかった」、「アカチャン可愛い!!」、「八週間楽しかったですありがとうございました」等の回答から、第 1 回から第 8 回まで、各回の目的に沿うような形で活動を行い、満足している様子が見える。

前述したように「活動全体のふりかえり」の「参加した活動全体をふりかえて、どれくらい満足していますか」の項目では、上記のことを裏付けるように、「とても満足した」と回答している。

(表あ 2-2 より)「参加した活動全体をふりかえて、良かったと思う点を教えてください」の項目では、「明治学院大のボランティアの赤ちゃんの子育ての会で赤子の尊さを知り、子育てがどれだけ大変か分かることができたすばらしい会でした。子育てを現在進行形で子育てをしてくれる親には感謝しかありません」と回答している。あ 2 にとって、第 5 回の「多様な他者との出会い」で、赤ちゃんに触れ合えたことが、赤ちゃんへの関心と理解を深め、さらには親への感謝へとつながった様子が見える。あ 2 は、第 5 回の活動が、深く印象に刻まれた活動だったと考えられる。

## (2) 社会力の育成について

(図あ 2-1 より) 第 1 回から第 8 回まで、社会力の根底にある「人間関係形成力」は、高水準で現状維持だったことが分かる (第 1 回から第 8 回まですべて 20 ポイント)。あ 2 は、よくお話しする子どもなので、もともと他者への関心や共感能力がある程度身につけていると考えられる。

なお、(表あ 2-2 より)「活動に参加して、自分が成長したなと思う点を教えてください」の項目で、「あまり学校生活で目上の人と接触する機会がないので大学生の方々と会えて、今後社会で必要な上下関係を知る重要な経験ができてとても嬉しかったです」と回答している。全 8 回の活動を通して、大学生と関わることで、年上の人との関わり方を学んだと思われる。

## (3) キャリア意識向上について

キャリア意識得点の変化 (図あ 2-5) をみると、キャリア意識得点が第 1 回 (60 ポイント) から第 7 回 (72 ポイント) にかけて 12 ポイント上昇したものの、第 8 回で 66 ポイントと 6 ポイント減少したことがわかる。特に、第 2 回、第 5 回、第 7 回の活動参加後にキャリア意識得点が 2 ポイント以上上昇している。下位項目をみると、第 1 回から第 2 回にかけて情報活用能力 (14 ポイント→20 ポイント)、意思決定能力 (17 ポイント→19 ポイント) がそれぞれ上昇した。また、情報活用能力については、第 4 回から第 5 回にかけて 4 ポイント上昇し、第 6 回から第 8 回にかけて 2 ポイントずつ上昇した。第 8 回を受けて、これからチャレンジしてみたいことや目標について尋ねたところ、「頭良くなりたい。金欲シイ。富士山登りたい。海外留学で友達作りたい。」と回答しており、本プログラムの参加を通じて「あ 2」のキャリア意識が向上したことが分かる。一方で、第 7 回から第 8 回にかけて、将来設計能力 (14 ポイント→8 ポイント)、意思決定能力 (20 ポイント→18 ポイント) がそれぞれ減少しているが、この原因に

については明らかにできなかった。

(4) その他（活動全体を通じて効果的だった支援方法、活動全体を通じて効果的だった環境設定等）

あ2は、（表あ2-1より）8回の活動すべてで「とても楽しかった」と回答し、活動全体の振り返りでも「とても満足した」と回答している。そうした点で、大学生の共感的・肯定的な関りの中で、あ2は、社会的居場所を確保していたと考えられる。

（表あ2-1より）「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嬉しかった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「やっぱラウルかな」、「それな」、「ウィー」等と回答している。こちらとしては、十分には理解できない回答が多く、あ2にとって、嬉しい関わりは何なのかは特定できなかった。なお、「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて "嫌だった" 関わり、言葉掛けがあったら教えてください」項目では、「なし」の回答であった。

（大学生への事後調査から）あ2と多くかかわった大学生から以下の記述があった。①その子どもと関わる際に意識したこと：気を悪くしないように意識した。なるべくその子が話そうとしていることを遮らないようにした。自分が知らない分野の話でも大きくリアクションをとるように心がけた。②その子どもに有効だと思う関わり：頷きや返事などリアクションをとることが有効なのではないかと感じた。興味を持っていると相手に感じてもらうことが重要だと思った。③うまくいかなかった関わり：スマートフォンを触っていることを注意して良いのか迷ったところ。できれば注意できればいいと感じたが、どう注意したら聞いてくれるのか伝え方を学びたいと感じた。④その子どもの変化：最初は、自分の興味あることだけを追い求めている感じがしたが、最後の留学など海外の話にも食いついていたので、新たな興味があることを見つけられたんじゃないかと感じた。

4-3. あ3の変化について 中学生

(0) 子どもの特性（ヒアリングシートの「備考」及び「その他特記事項」より転記）

- ・性格は穏やかで、落ち着きがある。昨年度よりコミュニケーションはかなり伸びた（まだまだだが）。
- ・特になし。追記：まじめにこなしてくれるかと。できればリーダーシップを養う場面を提供してほしい。

(1) 全体的な傾向

表あ3-1 あ3（〇、●、T、8回）の各回の感想等

	今日の活動は楽しかったですか？	今日の活動の感想等も記入	今日の活動で大学生にされて"嬉しかった" 関わり等も記入	今日の活動で大学生にされて"嫌だった" 関わり等も記入
第1回活動（大学生のことも知ろう①）	とても楽しかった	いろんなことを知れた。	最初いろんなことを話してくれたこと。	なし
第2回活動（ポッチャ&モルック体験）	とても楽しかった	ぼっちちともるっくがとても楽しかったです	いろいろな話せて嬉しかったです	全然ないです
第3回活動（共創ゲーム）	とても楽しかった	はあっていうゲームを自分で作ったりあてたりするのが楽しかったです	いろいろな話せて嬉しかったです	ないです
第4回活動（他者紹介動画作り）	とても楽しかった	自分で撮った動画を編集するのが楽しかったです	いろんなことを褒めてもらったのが嬉しかったです	ないです
第5回活動（多様な他者との出会い）	とても楽しかった	いろんなことを学べて楽しかったです	いろいろな話せて嬉しかったです	ないです
第6回活動（ジブリ映画からの気持ち探し①）	とても楽しかった	働くということを学べてよかったです	いろんなお話しができて嬉しかったです	ないです
第7回活動（ジブリ映画からの気持ち探し②）	とても楽しかった	いろんなことを学べて楽しかったです	いろいろな話せて嬉しかったです	ないです
第8回活動（大学生のことも知ろう②）	とても楽しかった	大学生のたくさんのお話を聞いて嬉しかったです	たくさんお話しできて嬉しかったです	ないです

（表あ3-1より）「今日の活動は楽しかったか」の項目で、第1回から第8回まで「とても楽しかった」と回答している。初回から最後まで、特に大きな問題はなく、あ3にとって有意義な活動であったといえよう。

（表あ3-1より）「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」の項目では、「ぼっちちともるっくがとても楽しかったです」、「はあっていうゲームを自分で作ったりあてたりするのが楽しかったです」、「働くということを学べてよかったです」等の回答から、第1回から第8回まで、各回の目的に沿うような形で活動を行い、満足している様子がうかがえる。

前述したように「活動全体のふりかえり」の「参加した活動全体をふりかえて、どれくらい満足していますか」の項目では、上記のことを裏付けるように、「とても満足した」と回答している。

（表あ3-2より）「参加した活動全体をふりかえて、良かったと思う点を教えてください」の項目では、「大学生と話せて良かった」と回答している。あ3は、大学生と交流できたことが嬉しかったと考えられる。また、「今回の活動全体を通しての感想や意見があれば、自由に記入してください」の項目では、「カードゲームやポッチャを大学生と一緒にするのがたのしかったです」と回答している。あ3にとって、第2回のポッ

チャ&モルック体験と第3回の共創ゲームが印象に残っている様子が見えてくる。

### (2) 社会力の育成について

(図あ3-1より) 第1回から第8回まで、上下する動きはあるが、社会力の根底にある「人間関係形成力」が多少上昇していることが見えてくる(第1回は18ポイント、第8回は20ポイント)。他者への関心や共感能力がある程度身についたといえそうである。

なお、(表あ3-2より)「活動に参加して、自分が成長したと思う点を教えてください」の項目では、「コミュニケーションが良かった」と回答しており、自分なりに「人間関係形成力」が向上したことを実感しているようである。

### (3) キャリア意識向上について

キャリア意識得点の変化(図あ3-5)を見ると、キャリア意識得点が第1回(64ポイント)から第8回(67ポイント)にかけて3ポイント上昇したことがわかる。第1回から第3回にかけて4ポイント減少、第5回から第6回にかけて5ポイント減少したものの、第5回から第8回にかけて9ポイント上昇した。下位項目を見ると、第1回から第2回にかけて情報活用能力(15ポイント→13ポイント)、意思決定能力(15ポイント→13ポイント)がそれぞれ減少した。また、人間関係形成能力については第6回活動後に大きく落ち込んだ(19ポイント→15ポイント)。一方で、情報活用能力については、第7回から第8回にかけて4ポイント上昇した。第8回を受けて、これからチャレンジしてみたいことや目標について尋ねたところ、「山登りもしてみたいし、やったことがないことにチャレンジしてみたいと思いました。」と回答しており、本プログラムの参加を通じて「あ3」のキャリア意識が向上したことが見えてくる。

### (4) その他(活動全体を通じて効果的だった支援方法、活動全体を通じて効果的だった環境設定等)

あ3は、(表あ3-1より)8回の活動すべてで「とても楽しかった」と回答し、活動全体の振り返りでも「とても満足した」と回答している。そうした点で、大学生の共感的・肯定的な関わりの中で、あ3は社会的居場所を確保していたと考えられる。

・(表あ3-1より)「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嬉しかった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「いろいろ話せて嬉しかったです」(第2、3、5、6、7回)の回答が多い。あ3にとって、相手の話を聞き、自分が話をするという一連の流れ(言葉のキャッチボール)が、嬉しい関わりだといえる。また、「いろんなことを褒めてもらったのが嬉しかったです」といった関わりも、有効であると考えられる。なお、「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嫌だった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「なし」の回答であった。

(大学生への事後調査から)あ3と多く関わった大学生から以下の記述があった。①その子どもと関わる際に意識したこと:あ3は常に気を遣って話しかけてくれました。私も初対面の人とは話すのは得意ですが、気を遣ってしまうという性格が故に、素をさらけ出さない時があります。あ3も、ずっと気を遣って

話してくれていたもので、緊張をほぐすために普段のあ3の趣味や、好きなことを聞きながら距離を縮めることを意識しました。②その子どもに有効だと思う関わり：自分からグイグイ距離を縮めるのではなく、あ3のテンポに合わせてながら仲を深めること。さらに、あ3の友人がいた方があ3の素のまま話してくれるので、二人よりは3人の方が居心地を感じられる子なのではないかを感じる。③うまくいかなかった関わり：スポーツが苦手と言っていたため、ポッチャは苦手だと思っていたが、一番楽しめていてくれた。体力争いのスポーツを使い、仲を深めるのにはあ3にはあっていないと感じる。④その子どもの変化：第6回目のキャリア意識を向上させる活動は慣れていないように見えた。時間をかけることで心も開いてくれるようになる子だった。

なお、FSとの振り返りで、あ3の成長に関して報告があった。①あ3は皆勤賞だった。中3で、まとめ役だからねと言っておいたので、その意識付けが出来ていた。本当は、めんどくさがり屋だが。〇〇先生の野菜のお礼状も、あ3はたくさん書いた。一番上で、やらなくちゃという意識があり、う4と同じ駅で降りるのだが、私が送り届けると言っていた。まとめる意識が上がったと思っている（第8回FSとの振り返り文字起こしデータより）。以上のように、不登校支援プログラムに参加して、あ3は、年長者として、みんなをまとめる意識が向上したのかもしれない。

さらに、こうしたあ3の変化は、この不登校支援プログラムに最も多く参加したアデコ・スタッフからも報告されている。具体的には、以下の通りである。「主にグループAからの参加だったので、学生パートナーとの関係性やグループ全体への参加の度合いも順調な様子が見られた。個別に話しかけた際も笑顔で受け答えをしてくれることが多く、過度な緊張感も感じられず、自然に参加をしてくれていた様子が見られた。休憩中にグループの違うお3と交流する姿もあり、FSスタッフの話していた『お姉さん』としての役割を、FSのメンバー内でも見せていた印象がある」。

4-4. あ4の変化について 中学生

(0) 子どもの特性（ヒアリングシートの「備考」及び「その他特記事項」より転記）

- ・親御さんと離れるケースが日頃あまりないため、その点が少し本人的に不安かもしれない。
- ・大人しいので、こちらから投げかけをすれば反応する。人見知りする。回数を重ねて関係値を築いていった方が良い。

(1) 全体的な傾向

表あ4-1 あ4（ 、 、 A、7回）の各回の感想等

	今日の活動は楽しかったですか？	今日の活動の感想等も記入	今日の活動で大学生にされて“嬉しかった”関わり等も記入	今日の活動で大学生にされて“嫌だった”関わり等も記入
第1回活動（大学生のことも知ろう①）	とても楽しかった	意外とフレンドリーで楽しかった	質問してくれたこと	ない
第2回活動（ポッチャ&モルック体験）	とても楽しかった	話しを聞くより今回の方が楽しかった	全部	ない
第3回活動（共創ゲーム）	とても楽しかった	特になし	全部	なし
第4回活動（他者紹介動画作り）	とても楽しかった	編集が大変そうだったが簡単で楽しかった	全部	ない
第5回活動（多様な他者との出会い）	とても楽しかった	活動が楽しかった	全部	なし
第6回活動（ジブリ映画からの気持ち探し①）	とても楽しかった	自分と違う意見が聞けて良かった	全部	ない
第7回活動（ジブリ映画からの気持ち探し②）	とても楽しかった	動画を見るのが楽しかった	全部	ない

（表あ4-1より）「今日の活動は楽しかったか」の項目で、第1回から第7回まで「とても楽しかった」と回答している。初回から最後まで、特に大きな問題はなく、あ4にとって有意義な活動であったといえよう。

（表あ4-1より）「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」の項目では、「編集が大変そうだったが簡単で楽しかった」、「自分と違う意見が聞けて良かった」（原文ママ）、「動画を見るのが楽しかった」等の回答から、第1回から第7回まで、各回の目的に沿うような形で活動を行い、満足している様子がうかがえる。

前述したように「活動全体のふりかえり」の「参加した活動全体をふりかえて、どれくらい満足していますか」の項目では、上記のことを裏付けるように、「とても満足した」と回答している。

（表あ4-2より）「参加した活動全体をふりかえて、良かったと思う点を教えてください」の項目では、「ポッチャといろんな年齢の人と交流するのがよかったです」と回答している。あ4は、第2回のポッチャ&モルック体験と年齢の異なる他者と交流すること（大学生との交流と多様な他者との交流か）に、今回の活動の良さを感じているようである。

## (2) 社会力の育成について

(図あ4-1より) 第1回のポイントが一番高く(17ポイント)、その後、低下したままの状態になっており(13ポイント)、社会力の根底にある「人間関係形成力」があまり身につかなかったようである。

その一方で、(表あ4-2より)「活動に参加して、自分が成長したなと思う点を教えてください」の項目では、「人とのコミュニケーションが少し成長しました」と回答しており、自分なりに「人間関係形成力」が向上したことを実感しているものの、「人間関係形成力」調査では捉えきれなかった。

## (3) キャリア意識向上について

キャリア意識得点の変化(図あ4-5)をみると、キャリア意識得点が第1回(64ポイント)から第8回(58ポイント)にかけて6ポイント減少したことがわかる。特に、第1回から第5回にかけて10ポイント減少し、第5回から第7回にかけて4ポイント上昇した。下位項目をみると、第1回から第2回にかけて人間関係形成力(17ポイント→13ポイント)、情報活用能力(15ポイント→13ポイント)、意思決定能力(16ポイント→15ポイント)がそれぞれ減少した。各回の振り返り(表あ4-1)や活動全体の振り返り(表あ4-2)をみると、ポッチャのような身体を動かす活動があっている様子が見える。以上より、キャリア意識質問票の得点からは、「あ4」のキャリア意識の向上を認めることはできなかった。一方で、活動全体を通してコミュニケーションの成長を感じる(表あ4-2)などの人間関係形成能力の向上が示唆された。

## (4) その他(活動全体を通じて効果的だった支援方法、活動全体を通じて効果的だった環境設定等)

あ4は、(表あ4-1より)7回の活動すべてで「とても楽しかった」と回答し、活動全体の振り返りでも「とても満足した」と回答している。そうした点で、大学生の共感的・肯定的な関りの中で、あ4は、社会的居場所を確保していたと考えられる。

(表あ4-1より)「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嬉しかった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「全部」(第2～7回)の回答が多い。あ4にとって、今回の大学生との交流の全てが、嬉しい関わりだといえる。また、「質問してくれたこと」といった、自分のことを気にかけてくれる関わりも、有効であると考えられる。なお、「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嫌だった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「なし」の回答であった。

(大学生への事後調査から)あ4と多くかかわった大学生から以下の記述があった。①その子どもと関わる際に意識したこと：その子の喋るタイミングを大事にしてあげること、こちらから積極的に話題を提供すること、その子の興味を中心に色々教えてもらうこと、自己開示をすること。②その子どもに有効だと思う関わり：上記と同じ。③うまくいかなかった関わり：特になし。④その子どもの変化：積極的に話を広げてくれたり、自分からこちらの自己開示に対してアドバイスをしてくれるようになったり、話す前に言葉に詰まらなくなった。

なお、FSとの振り返りで、あ4の成長に関して報告があった。①あ4は、人と一緒に何かをするのが出

来ない子だった。第 1 回目は、お母さんが正門までついてきた。お母さんは大学に入れないことが分かったと、あ4は「うそー」と言って戸惑っていた。しかし、2 回目以降は、「一人で来れるようになった」（第 7 回 FS との振り返り文字起こしデータより）。②あ4は、一人で行動できるようになった。この活動に参加して、自信になったのでは。昨日（水）は FS に来たが、これまではお母さんと一緒に来ていたが、昨日はお母さんではなく、一人で FS に来ることが出来た（第 8 回 FS との振り返り文字起こしデータより）。以上のように、不登校支援プログラムに参加して、あ4は、自信が付き、自立への道を歩み始めているのかもしれない。

さらに、こうしたあ4の変化は、この不登校支援プログラムに最も多く参加したアデコ・スタッフからも報告されている。具体的には、以下の通りである。「第 4 回以降グループでの活動時に、特に学生パートナーと笑顔で話すシーンを見る機会が増えた印象。学生パートナーとの関係性の良さが、第 3 者視点からも良うかがえた。全体の質問タイムで発言する場面まではあまりなかったが、インプリー館での見学時に見せた積極性（一人だけ窓を空ける役を提案され、あ4だけが拳手をし、みんなの前で恐る恐る窓を開けた場面）は、あ4の大きな変化の 1 つだった」。

#### 4-5. い2の変化について 中学生

##### (0) 子どもの特性（ヒアリングシートの「備考」及び「その他特記事項」より転記）

- ・人間関係でトラブルがあると、チックが出る。意外に繊細。追記：全日制の高校への進学を希望しているので、リーダーシップの面、新しい環境への適応（場所、人）など、世界を広げてほしい。スクール外の関りを増やしてほしいという思い。成長をしてもらいたいという思いがある。
- ・人懐っこいので、特に気にせず接してほしい。

##### (1) 全体的な傾向

表い2-1 い2（ 、 、 T、7回）の各回の感想等

	今日の活動は楽しかったですか？	今日の活動の感想等も記入	今日の活動で大学生にされて“楽しかった” 関わり等も記入	今日の活動で大学生にされて“嫌だった” 関わり等も記入
第1回活動（大学生のことも知ろう①）	とても楽しかった	これからのものしりとおもう	特になし	とくになし
第2回活動（ポッチャ&モルック体験）	とても楽しかった	ポッチャが楽しかった	とゲーテッチをし たのが楽しかった	特になし
第3回活動（共創ゲーム）	とても楽しかった	ゲームを作るのが楽しかった	とくになし	とくになし
第4回活動（他者紹介動画作り）	とても楽しかった	編集するのが楽しかった	とくになし	とくになし
第5回活動（多様な他者との出会い）	とても楽しかった	多様な人との関わりがたのしかった。	外国の方との別れる時のバイバイ	とくになし
第7回活動（ジブリ映画からの気持ち探し②）	少し楽しかった	今日は国語の授業みたいだった	特になし	なし
第8回活動（大学生のことも知ろう②）	少し楽しかった	大学生の発表が面白かった	とくになし	とくになし

(表い2-1より)「今日の活動は楽しかったか」の項目で、第1回から第5回まで「とても楽しかった」と回答し、第7回、第8回は「少し楽しかった」と回答している。初回から最後まで、特に大きな問題はなく、い2にとって概ね有意義な活動であったといえよう。

(表い2-1より)「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」の項目では、「今日は国語の授業みたいだった」(第7回)といった否定的なニュアンスの回答もあったが、「ゲームを作るのが楽しかった」、「多様な人との関わりがたのしかった」、「大学生の発表が面白かった」等の回答から、第1回から第8回まで(第6回は除き)、各回の目的に沿うような形で活動を行い、概ね満足している様子が見えてくる。

前述したように「活動全体のふりかえり」の「参加した活動全体をふりかえって、どれくらい満足していますか」の項目では、上記のことを裏付けるように、「とても満足した」と回答している。

(表い2-2より)「参加した活動全体をふりかえって、良かったと思う点を教えてください」の項目では、「B2君とという大学生と話すのが楽しかった。大学生と関わって良かった」。(原文ママ)と回答している。い2は、パートナー(ペア)となった大学生のB2君との関わりをはじめ、大学生との交流が、印象に残ったようである。

## (2) 社会力の育成について

(図い2-1より)第1回から第8回まで、社会力の根底にある「人間関係形成力」が多少上昇していることが分かる(第1回は14ポイント、第8回は16ポイント)。他者への関心や共感能力がある程度身についたといえそうである。

また、(表い2-2より)「活動に参加して、自分が成長したと思う点を教えてください」の項目では、「ラボに参加して、会話の時の受け応えができるようになった」と回答しており、自分でも「人間関係形成力」が向上したことを実感しているようである。

## (3) キャリア意識向上について

キャリア意識得点の変化(図い2-5)を見ると、キャリア意識得点が第1回(54ポイント)から第5回(56ポイント)にかけて2ポイント上昇したものの、第7回で49ポイントに落ち込み、第8回では53ポイントまで回復した。特に、第4回から第5回にかけては2ポイント上昇、第7回から第8回にかけては4ポイント上昇した。下位項目を見ると、人間関係形成能力に関しては、第1回から第8回にかけて緩やかな上昇が認められた(14ポイント→16ポイント)。以上より、キャリア意識得点全体としては「い2」のキャリア意識向上を認めることはできなかった。一方で、第8回を受けて、これからチャレンジしてみたいことや目標について尋ねたところ、「英語を勉強して、留学に行ってみたい。英検受かる!」と回答しており、第8回の活動は「い2」のキャリア意識が向上に寄与した様子が見えてくる。

(4) その他(活動全体を通じて効果的だった支援方法、活動全体を通じて効果的だった環境設定等)

い2は、(表い2-1より)7回の活動すべてで概ね「楽しかった」と回答し、活動全体の振り返りでも「とても満足した」と回答している。そうした点で、大学生の共感的・肯定的な関りの中で、い2は、社会的居場所を確保していたと考えられる。

(表い2-1より)「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて"嬉しかった"関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「とくになし」の回答が多いものの、「B2さんとグータッチをしたのが楽しかった」、「外国の方との別れる時のバイバイ」といった回答もあった。B2君は野球をやっていてプロ野球にも詳しい大学生である。また、い2も、現在、野球をやっている。お互いに共通の趣味があり、独特のノリのなかでいろいろな交流できたことが、い2にとって心地よかったのかもしれない。したがって、い2にとっては、共通の話題がある中での関りが有効なのかもしれない。なお、「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて"嫌だった"関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「なし」の回答であった。

(大学生への事後調査から)い2と多くかかわった大学生から以下の記述があった。①その子どもと関わる際に意識したこと：コミュニケーションが比較的得意な子に見えたため、なるべく自然体で話すことを意識した。②その子どもに有効だと思う関わり：興味のある話題(野球など)を中心にコミュニケーションを取ると打ち解けやすいと感じた。③うまくいかなかった関わり：特にないが、難しい質問や深い質問に対しては、焦らせずにじっくり考える時間を与えた方が本音を引き出しやすかった。④その子どもの変化：いい意味で大きな変化はなかったが、回を重ねるにつれてどんだん心を開いて、向こうから積極的に声をかけてくれるようになった。

4-6. う1の変化について 中学生

(0) 子どもの特性（ヒアリングシートの「備考」及び「その他特記事項」より転記）

- ・特になし
- ・あまり高圧的に接しないよう

(1) 全体的な傾向

表う1-1 う1（〇、●、A、8回）の各回の感想等

	今日の活動は楽しかったですか？	今日の活動の感想等も記入	今日の活動で大学生にされて“嬉しかった”関わり等も記入	今日の活動で大学生にされて“嫌だった”関わり等も記入
第1回活動（大学生のことも知ろう①）	とても楽しかった	大学生のことも知れた	割と話しかけてくれた事	特になし
第2回活動（ポッチャ&モルック体験）	とても楽しかった	体を動かせて、楽しかった。	話しかけてきてくれる事	特になし
第3回活動（共創ゲーム）	とても楽しかった	カードゲームができて面白かった。	割と話しかけてくれたこと	特になし
第4回活動（他者紹介動画作り）	とても楽しかった	あんまりやらない形の動画編集ができて楽しかった	特になし	特になし
第5回活動（多様な他者との出会い）	とても楽しかった	多様な人と関わって、貴重な経験ができました	特になし	特になし
第6回活動（ジブリ映画からの気持ち探し①）	とても楽しかった	考え方を共有できたり、働くことの意味を改めて知れた	特になし	特になし
第7回活動（ジブリ映画からの気持ち探し②）	あまり楽しくなかった	権柄考えさせられる内容だった。	特になし	特になし
第8回活動（大学生のことも知ろう②）	とても楽しかった	色々な大学生と関わって面白かった	特になし	特になし

（表う1-1より）「今日の活動は楽しかったか」の項目で、第7回では「あまり楽しくなかった」と回答しているものの、それ以外の第1回から第8回まで「とても楽しかった」と回答している。初回から最後まで、特に大きな問題はなく、う1にとって概ね有意義な活動であったといえよう。

（表う1-1より）「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」の項目では、「結構考えさせられる内容だった」（第7回）という肯定的にも否定的にもとれる回答があったが、「体を動かせて、楽しかった」、「考え方を共有できたり、働くことの意味を改めて知れた」、「色々な大学生と関わって面白かった」等の回答から、第1回から第8回まで、各回の目的に沿うような形で活動を行い、概ね満足している様子がうかがえる。

前述したように「活動全体のふりかえり」の「参加した活動全体をふりかえて、どれくらい満足していますか」の項目では、上記のことを裏付けるように、「とても満足した」と回答している。

（表う1-2より）「参加した活動全体をふりかえて、良かったと思う点を教えてください」の項目では、「大学生と関わったり、普段できない経験をさせてもらえた」と回答している。普段関わることにない大学生との交流や、普段行わない各回の活動に充実感を得た様子がうかがえる。

## (2) 社会力の育成について

(図1-1より) 第1回から第8回まで、社会力の根底にある「人間関係形成力」が若干低下していることがうかがえる(第1回は16ポイント、第8回は15ポイント)。他者への関心や共感能力は、あまり身につかなかったようである。

その一方で、(表1-2より)「活動に参加して、自分が成長したと思う点を教えてください」の項目では、「お堅いところでも過度に緊張しなくなった」と回答しており、様々な場でもリラックスして参加できるようになったものの、そうしたことは「人間関係形成力」調査では捉えきれなかった。

## (3) キャリア意識向上について

キャリア意識得点の変化(図1-5)をみると、キャリア意識得点が第1回で59ポイントだったものが、第4回で55ポイントに落ち込み、その後、第5回から第7回にかけて62ポイントまで上昇した。下位項目をみると、情報活用能力と将来設計能力については、後半の活動(第6回、第7回)で上昇した。以上より、キャリア意識得点全体としては「う1」のキャリア意識向上を認めることはできなかった。一方で、第8回を受けて、これからチャレンジしてみたいことや目標について尋ねたところ、「海外に行ったり、やりたいことを素直にやること。」と回答するなど、「う1」のキャリア意識が部分的に向上した様子が見られる。

## (4) その他(活動全体を通じて効果的だった支援方法、活動全体を通じて効果的だった環境設定等)

う1は、(表1-1より)8回の活動すべてで概ね「楽しかった」と回答し、活動全体の振り返りでも「とても満足した」と回答している。そうした点で、大学生の共感的・肯定的な関わりの中で、う1は、社会的居場所を確保していたと考えられる。

(表1-1より)「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嬉しかった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「特になし」の回答が多いものの、「話かけてくれる」という回答が複数みられた。他者から話しかけることが、う1にとっては、嬉しい関わりであると考えられる。なお、「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嫌だった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「なし」の回答であった。

(大学生への事後調査から)う1と多くかかわった大学生から以下の記述があった。①その子どもと関わる際に意識したこと：丁寧な言葉づかいや相手の話をちゃんと聞くことを意識した。また、緊張をほぐすために積極的に話かけることを意識した。②その子どもに有効だと思う関わり：趣味や出身地の話をする。③うまくいかなかった関わり：特になし。④その子どもの変化：初めは緊張してたのであまり積極的ではなかったが、回を重ねていくにつれて自分からでなく相手からコミュニケーションを取ろうとしていた。

4-7. う4の変化について 小学校高学年

(0) 子どもの特性（ヒアリングシートの「備考」及び「その他特記事項」より転記）

- ・追記：コミュニケーション上も特段不安なし。普通に接してもらいたい、癖はない。小1から不登校
- ・特になし。

(1) 全体的な傾向

表う4-1 う4（ 、 、 T、7回）の各回の感想等

	今日の活動は楽しかったですか？	今日の活動の感想等を記入	今日の活動で大学生にされて“嬉しかった”関わり等を記入	今日の活動で大学生にされて“嫌だった”関わり等を記入
第2回活動（ポッチャ&モルック体験）	とても楽しかった	とても良かったです	皆優しくして下さいました	特にないです
第3回活動（共創ゲーム）	とても楽しかった	難しかったです	特にないです	特にないです
第4回活動（他者紹介動画作り）	とても楽しかった	編集が楽しかった	話せて良かった	特になし
第5回活動（多様な他者との出会い）	とても楽しかった	指文字を教えてくださいました	優しくしてくれました	特にない
第6回活動（ジブリ映画からの気持ち探し①）	とても楽しかった	なかなかやらない事だったので新しく良かったです	話かけてくれて嬉しかったです	特になし
第7回活動（ジブリ映画からの気持ち探し②）	とても楽しかった	ジブリが面白かったです	話しかけてくれた	特に無し
第8回活動（大学生のことも知ろう②）	とても楽しかった	大学生の字を知れて面白かったです	漢字を教えてくださいました	特に無し

（表う4-1より）「今日の活動は楽しかったか」の項目で、第2回から第8回まで「とても楽しかった」と回答している。初回から最後まで、特に大きな問題はなく、う4にとって有意義な活動であったといえる。

（表う4-1より）「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」の項目では、「難しかった」（第3回活動）といった否定的なニュアンスの回答もあるが、「編集が楽しかった」、「指文字を教えてくださいました」、「ジブリが面白かったです」等の回答から、第2回から第8回まで、各回の目的に沿うような形で活動を行い、概ね満足している様子が見えてくる。

前述したように「活動全体のふりかえり」の「参加した活動全体をふりかえて、どれくらい満足していますか」の項目では、上記のことを裏付けるように、「とても満足した」と回答している。

（表う4-2より）「参加した活動全体をふりかえて、良かったと思う点を教えてください」の項目では、「ポッチャやモルックが楽しかったです。また大学を見てみたいです」と回答している。第2回のポッチャ&モルック体験や活動前の大学案内が、印象に残っている様子が見えてくる。

(2) 社会力の育成について

（図う4-1より）第1回から第8回まで、社会力の根底にある「人間関係形成力」は、多少の上下の動きはあるものの、ほぼ横ばいであった（第2回は13ポイント、第8回は13ポイント）。他者への

関心や共感能力は、あまり身につかなかったようである。

その一方で、(表う4-2より)「活動に参加して、自分が成長したなと思う点を教えてください」の項目では、「コミュカが上がった気がする」と回答しており、自分なりに「人間関係形成能力」が向上したことを実感したようであるが、そうしたことは「人間関係形成力」調査では捉えきれなかった。

### (3) キャリア意識向上について

キャリア意識得点の変化(図う4-5)をみると、キャリア意識得点が第2回(54ポイント)から第8回(57ポイント)にかけて3ポイント上昇したことがわかる。全体の振り返り(表う4-2)の「成長したと思う点」の記述をみると、「コミュカが上がった気がする。体力がついた。」と回答するなど、今回のプログラムにより「う4」のキャリア意識が向上した様子がうかがえる。

(4) その他(活動全体を通じて効果的だった支援方法、活動全体を通じて効果的だった環境設定等)

う4は、(表う4-1より)7回の活動すべて「とても楽しかった」と回答し、活動全体の振り返りでも「とても満足した」と回答している。そうした点で、大学生の共感的・肯定的な関りの中で、う4は、社会的居場所を確保していたと考えられる。

(表う4-1より)「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嬉しかった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「皆様優しくして下さいました」、「優しくしてくれました」という回答があった。う4にとって、「優しく」接することが、嬉しい関わりであるといえる。また、「話しかけてくれる」の回答も複数あり、話しかけることも有効であると考えられる。なお、「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嫌だった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「なし」の回答であった。

(大学生への事後調査から)う4と多くかかわった大学生から以下の記述があった。①その子どもと関わる際に意識したこと：絵を描くことや縄跳びなど趣味が多く、ネイルやヘアアレンジも自分でやっていたため、趣味や得意なことを中心に聞くことを意識した。その話で打ち解けてくれたのか、ちょっとした空き時間などでも話をすることができた。②その子どもに有効だと思う関わり：趣味や興味のあることを話すと表情がやわらかくなっていたので、有効的だったと感じた。また、たまごっちを育てていたので、隔週でどのくらい育った?と聞いて話に繋がりを持ったことも有効的だったと思う。③うまくいかなかった関わり：小学校高学年とは思えないほどしっかりしていて、礼儀も正しく、とてもいい子だったため、特に感じなかった。④その子どもの変化：回を重ねる毎に表情が柔らかくなったと思う。後半は「また来週ねー」と手を振って挨拶できたことも嬉しかった。

#### 4-8. お3の変化について 中学生

(0) 子どもの特性（ヒアリングシートの「備考」及び「その他特記事項」より転記）

- ・運動能力はかなり高い。癩癩持ち。追記：参加回数としては多めに来れそう。少しフレンドリーすぎる一面があるが、大人との触れ合いにおいては特段懸念はない。子ども同士の場合、その距離感の近さゆえにトラブルに繋がったり、感情のコントロールが上手くできないことなどがある。
- ・大学生とは普通に関われると思われる。

#### (1) 全体的な傾向

表お3-1 お3（〇、〇、T、7回）の各回の感想等

	今日の活動は楽しかったですか？	今日の活動の感想等も記入	今日の活動で大学生にされて“嬉しかった”関わり等も記入	今日の活動で大学生にされて“嫌だった”関わり等も記入
第2回活動（ポッチャ&モルック体験）	とても楽しかった	やったことがないスポーツをやってみてとても楽しかった	ほなしかけてくれたこと	ないです
第3回活動（共創ゲーム）	とても楽しかった	とても楽しかった	話題をふってくれた	ない
第4回活動（他者紹介動画作り）	とても楽しかった	楽しかった	声をかけてくれた	ない
第5回活動（多様な他者との出会い）	とても楽しかった	ほかのいろいろな人と交流できてとても楽しかったです。	話しかけてくれた	ない
第6回活動（ジブリ映画からの気持ち探し①）	とても楽しかった	とても楽しかった	話してくれた	ない
第7回活動（ジブリ映画からの気持ち探し②）	とても楽しかった	楽しかった	声をかけてくれた	ないです
第8回活動（大学生のことも知ろう②）	とても楽しかった	とても勉強になりました	質問の提案をしてくれた	ない

（表お3-1より）「今日の活動は楽しかったか」の項目で、第2回から第8回まで「とても楽しかった」と回答している。初回から最後まで、特に大きな問題はなく、お3にとって有意義な活動であったといえよう。

（表お3-1より）「今日の活動についての感想や意見を自由に記入してください」の項目では、「やったことがないスポーツをやってみてとても楽しかった」、「ほかのいろいろな人と交流できてとても楽しかったです」、「とても勉強になりました」等の回答から、第2回から第8回まで、各回の目的に沿うような形で活動を行い、概ね満足している様子が見えらる。

なお、お3は、「活動全体のふりかえり」の調査に回答していない。

#### (2) 社会力の育成について

（図お3-1より）第1回から第8回まで、社会力の根底にある「人間関係形成力」は、多少の上下の動きはあるものの、多少向上していることがうかがえる（第2回は17ポイント、第8回は19ポイント）。他者への関心や共感能力は、ある程度身についたといえよう。

### (3) キャリア意識向上について

キャリア意識得点の変化（図お3-5）をみると、キャリア意識得点が第2回（71ポイント）から第8回（74ポイント）にかけて3ポイント上昇したことがわかる。特に、第7回では77ポイントとほとんどすべての質問項目でポジティブな回答をしており、最高得点となった。一方で、第5回の活動後は64ポイントに落ち込んだ。第8回終了後の振り返りの記述をみると、「経験を活かして仕事に就くのが、とてもいいと思いました。」「根拠のない自転車のチャレンジをしてみたいです。ロードバイクで江ノ島に行ってみよう。」と回答するなど、今回のプログラムにより「お3」のキャリア意識が向上した様子が見えてくる。

### (4) その他（活動全体を通じて効果的だった支援方法、活動全体を通じて効果的だった環境設定等）

お3は、（表お3-1より）7回の活動すべて「とても楽しかった」と回答している。そうした点で、大学生の共感的・肯定的な関わりの中で、お3は、ある程度、社会的居場所を確保していたと考えられる。

（表お3-1より）「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嬉しかった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「話しかけてくれた」という回答が多かった。お3にとっては、「話しかけてくれる」ことが、嬉しい関わりであるといえる（声をかける、質問の提案をすることも含め）。なお、「今日の活動の中で、大学生スタッフにされて「嫌だった」関わり、言葉掛けがあったら教えてください」の項目では、「なし」の回答であった。

（大学生への事後調査から）お3と多くかかわった大学生から以下の記述があった。①その子どもと関わる際に意識したこと：何を聞かれたくないか、話したくないかについては常に考えていました。②その子どもに有効だと思う関わり：あちらから、かなり話しに来てくれるので、それに対して興味ない素振りや否定をしない態度が良いと思います。③うまくいかなかった関わり：主に先生方にお3の解答を見られるのが、凄く嫌そうでした。そこで、先生方に見ないように言うのか、「見られるのは我慢するように」というようなアプローチをする方が良いのか分かりませんでした。④その子どもの変化：最初と比べて（最初も話してはくれたのですが）、話す内容が個人的な趣味などある意味での自己開示が多くなり、心の壁がなくなっていったと感じました。

## 第4章 支援者に必要な資質・能力の分析（任意）

### 4.1 支援者に必要な資質・能力の検証方法と仮説

活動全体を振り返って、大学生自身が成長した点等を検討することを通して、「支援者に必要な資質・能力」の一端について検討する。大学生は、不登校支援プログラムに参加して、どのような変化があったのであろうか。

### 4.2 支援者に必要な資質・能力の検証における記録方法

・活動全体の振り返りデータ（自由記述）

### 4.3 支援者に必要な資質・能力の検証における分析ツール・手法

・質的分析

### 4.4 支援者に必要な資質・能力の検証における検証結果

#### （1）大学生の満足度

今回の不登校支援プログラムの主要なメンバーであった大学生 14 名に、活動全体を振り返っての満足度を聞いた。「とても満足した」が 85.7%、「まあ満足した」が 14.3%であった。大学生全員が、不登校支援プログラムに参加したことに満足感を得ている。

#### （2）成長した点等の分析

その満足感の中身を検討するために、「この不登校支援プログラムに参加して、成長したことや良かったことは何ですか」（自由記述）の項目を分析することにする。資料 10 は、大学生の回答をまとめたものである。資料 10 の分析から得られた知見は以下の 3 点である。

第 1 に、「不登校」ラベルを剥がすことである。

例えば、以下の回答があげられる。「（B 2 の回答より）『不登校』と聞くと身構えてしまうが、偏見を持たずにいつも通りの自分で自然体で接する方が、いい関係を築くことができると感じた」。「（A 1 の回答より）最初に不登校というラベルを貼ってしまうのですが、不登校支援プログラムを通じて、そのラベルを剥がすことができました」と。「（D 3 の回答より）生徒にある『不登校』という背景だけに着目しなくなったのは良かった点だと感じました。『あの子は不登校だから』とレッテル貼りをしていないことの大切さを改めて実感できました」。不登校の子どもと関わると思うと、何か身構えてしまう所があったが、今回の不登校支援プログラムで不登校の子どもたちと関わり、自然体に関わる事が大事であることに気付いたことが分かる。そういう意味で、「不登校」ラベルを剥がし、普通に関わる事の重要性を自覚したといえよう。

そうした経験をもとに、不登校に関する理解が深まり、次への学びへとつながった学生もいた。例えば、以下の回答があげられる。「（A 3 の回答より）自分の中学生時代にいた不登校の生徒だけでなく、

『不登校』という概念も幅広いということを今回の経験で学ぶことができた。「(A4の回答より) これまで自身が抱いていた不登校生像を、実際の不登校生と関わることで実感・実態を掴むことができ、より効果的な関わり方を模索できる機会になった上、不登校生への接し方の心理的ハードルが下がったように感じる」。「(C1の回答より) 色々な活動をしたが、小中学生と関わる機会があまりないのでとても良い経験になった。また、これまではあまり不登校についてあまり考えたことがなかったが、8回の活動を通じて、不登校の実情など自分の中で考える良いきっかけで、これからも色々学ぼうと思った」。

第2に、不登校の子どもとの関わり方を学んだことである。

例えば、以下の回答があげられる。「(A2の回答より) 傾聴力が成長したと感じた。子供たちの話を聞きながら作業をしたり、活動をすることでどんなことを子供たちが求めているのかを感じ取ることができた」。「(B3の回答より) 相手に寄り添いながら、話すことができた。先週の話覚えていて、その話をする嬉んでくれた」。「(B4の回答より) フリースクールに通う小中学生とは関わったことがなく、また不登校という背景がある彼らと、普段通りの接し方でいいのかなど、どのように関われば良いか不安であった。しかし、実際に関わり、なんとなくその子の特性を知り、その子に適した関わり方やその子の周囲環境の必要性について学べたと思われる」。「(C2の回答より) 人に物事を伝える難しさや物事を伝えるために工夫する大切さを学んだ。小中学生という年の離れた子どもと関わる機会はなかったので、よりわかりやすい言葉で伝えようと工夫をした」。「(D1の回答より) 子どもたちの気持ちや背景を考えて行動発言することができた。様々な配慮も心がけた。特に、司会をやった回では子どもたちが楽しめる、かつ将来に繋げられるように打ち合わせを入念に行い、活動中だけではなく休憩時間にも気をつけた。前で立って子どもたちみんなにとってわかりやすい説明をすること、インクルージョンな空間になるように心がけることができた」。

以上のように、大学生は、不登校の子どもとの関りを通して、傾聴力、相手に寄り添いながら話す、その子に適した関わり方、子どもたちの気持ちや背景を考えて行動発言する、わかりやすい説明をするといったことを身につけたことが分かる。こうした関わり方を学んだことが、自分の成長につながっているといえよう。

第3に、揺さぶられる体験である。

例えば、以下の回答があげられる。「(D2の回答より) 初めて会う人に対して自分から話しかける事が苦手だったが、今回参加してくれていた子どもたちは緊張をしていたが、話すことに抵抗がない子が多かったので、自分が苦手なことでもチャレンジできたと思う」。「(A4の回答より) 他の学生の接し方や動きから学ぶことも多く、団結して一つのプログラムの準備・運営をしたことによって学生同士の相互理解や団結力も高まったように感じる」。「(B1の回答より) 私のグループが計画・進行を行った第〇回目の〇〇〇においては、大学生も子供たちも一緒に楽しく活動を行っている様子を見ることができ、達成感を感じることができた」。「(B4の回答より) 来てくれた子どもたちは、ほんの一例に過ぎないかもしれないが、彼らとの交流や活動は私にとって有意義な経験となった」。「(C3の回答より) 一つ目は、子どもたちとはもちろんですが、他の大学生メンバーや先輩方と協力して仲良くなれたことがよかったです。最後にハイタッチした時とても心が温かくなって、子どもたちに出会うことができてよかったと本当に思いました。何か良い影響を与えることができていたら、ふとした時に思い出してくれたらうれしいなと思います。二つ目は、内面・精神的なモラルの向上につながったことです。子どもたちや他の大学生の気持ちや、ジブリキャラクターの気持ち

を考えながら毎回のプログラムを過ごして、内面的に成長できたと思います」。「(D3の回答より) 不登校の改善とか、社会性を高めるという目標もちろん大事ですが、それにこだわりすぎずに『まずは一緒に楽しむ』経験が出来て良かったです。本当にありがとうございました！」

このように、苦手なことにチャレンジする、団結力の高まりを感じる、達成感、有意義な経験、心が温かくなる、一緒に楽しむといった、ある意味で、心揺さぶられる体験をしたことが、大学生の心に刻まれていることが分かる。こうした感動的な体験が、大学生にとって良かったことであるといえよう。

#### 4.5 まとめ

##### (1) 結果のまとめ

大学生の「活動全体の振り返りデータ」の「この不登校支援プログラムに参加して、成長したことや良かったことは何ですか」の項目を分析した結果、3つの知見が得られた。第1に「不登校」ラベルを剥がすことである。第2に不登校の子どもとの関わり方を学んだことである。第3に揺さぶられる体験である。不登校支援プログラムに参加した大学生は、3つの点で、成長したと感じたり、良かったと感じたりした。

##### (2) 今後に向けて

なお、この大学生たちが不登校の子どもたちと接したのは8回でしかない。なので、「支援者に必要な資質・能力」について、この知見をもって断言できるものではない。

ところで、この不登校支援プログラムに参加した大学生は、本学の教職課程を履修している3年生が多い。彼らは、来年度に中学校か高校で教育実習を行う。不登校の児童生徒数が増加している現在、教育実習に行けば、彼らが不登校の子どもたちと関わることは十分にありうることである。なので、彼らは、この不登校支援プログラムで不登校の子どもたちと交流することは、自分たちの将来にとって重要な学びとなることを十分に自覚していた。そうした意味で、彼らは、この不登校支援プログラムに真剣に参加したことは間違いない。

そうであるならば、彼らが成長した等と感じたことは、不登校の子どもに関わる者にとって、参考となる部分があると考えられる。すなわち、「不登校」ラベルを剥がすこと。不登校の子どもとの関わり方を学ぶこと。そして、子どものためと思いつつ、実は自分自身が楽しかったり、心温まったりと揺さぶられることが大切なのではないか。「支援者に必要な資質・能力の分析」の一助となれば、幸いである。

#### <補足>

大学生側からみた子どものエピソードを2つ報告する。

1. 大学生のB4は、い4の子どもとパートナー（ペア）となり活動をしていた。B4は、い4となかなか親しくなれずに悩んでいた。また、い4が休みがちになったことにも責任を感じていた。そうしたなか、B4は第8回活動で発表をすることになった。発表でB4は、い4にエールとなるようなメッセージを送るつもりだった。なので、B4から、第8回にい4が参加するようにFSのスタッフに伝えてほしいと言われ、石井はFSのスタッフに伝えた（FSとの第7回振り返りで）。しかし、い4は、第8回活動には参加しなかった（理由は不明）。そこで、B4が発表した内容をい4に見てもらうために、B4の発表を撮影し、その動画を

FSに送った。このエピソードには、若者特有のある種の強引さがあるものの、「何とかしたい」というB4のい4への熱い思いを示すエピソードであるといえよう。

2. 1月6日の火曜4限の教職専門演習の授業で、大学生と不登校支援プログラムの振り返りを行った。そのなかで、D3から次のような発言があった。「第8回で最後にハイタッチをして退場するとき、お3が、名残惜しそうな感じだったので、涙が出たんですよ。オレ、本当に」。お3は、D3がパートナー（ペア）となり活動をしていた子どもである。このエピソードから、D3とお3が、活動を通して非常に親密になった様子がうかがえる。

以上のエピソードから、大学生は、この不登校支援プログラムを通して心を揺さぶられ、子どもから大きな影響を受けていたことが分かる。

## 第5章 調査研究に関する総括

### 5.1 調査研究において実施された活動内容の効果

第1回～第8回の活動では、子どもたちは楽しく活動した（第2章参照）。社会力とキャリア意識に関して、個別の子どもの変化をみても、量的分析では一部の子どもは向上していたことが明らかになった。質的分析では、より多様な影響がみられた（第3章参照）。そうした点で、今回の活動は、社会力とキャリア意識の育成に、一定の効果があったといえる。

#### 5.1.1 子供一人ひとりの興味関心を引き出す支援方法

興味関心を引き出す支援方法として、以下の3点を指摘する。

第1に、多様な活動である。今回の活動では、大学生の発表、ポツチャ&モルック、共創ゲーム、他者紹介動画づくり、多様な他者との出会い、ジブリ映画からの自分の気持ち探し等、多様な活動を行った。こうした多様な活動であれば、子どもは飽きることなく活動に参加できるし、様々な刺激を受けることができると考えられる。

第2に、共感的・肯定的な関りである。大学生が、共感的・肯定的な関りをすることで、子どもたちは安心して活動に参加していたことが明らかになった（第2章、第3章参照）。安心できる空間で活動できたからこそ、社会力やキャリア意識を向上させることができたと考えられる。

第3に、少し先の将来を提示することである。大学で活動することで、子どもたちにとって大学という場所が身近に感じることができたと考えられる（大学案内ツアーも含めて）。また、大学生と関わることで、大学生のことを知ることができた。さらに、第8回の活動で、通信制高校を卒業した大学生や、不登校経験のある大学生の発表を聞くことで、自分の少し先の将来を考えるきっかけとなった（第2章、第3章参照）。このように、小学生、中学生の子どもたちの少し先の将来を提示することは重要であるといえよう。

#### 5.1.2 子供一人ひとりの興味関心を引き出す環境設定

- 大学で活動することで、子どもたちの将来に関心に向けさせることができた。
- アートホールという閉鎖的な空間で活動を行うことで、子どもたちは活動に集中することができた。
- 子どもと大学生がペアとなり活動することで、濃密な関りをすることができた。
- 子ども3～4人と大学生3～4人でグループになることで、多様な関りが生まれた。

### 5.2 支援者に必要な資質・能力

活動終了後に、大学生に「この不登校支援プログラムに参加して、成長したことや良かったことは何ですか」を尋ねた。回答を分析すると、以下の3点が明らかになった。第1に「不登校」ラベルを剥がすことである。第2に不登校の子どもとの関わり方を学んだことである。第3に揺さぶられる体験である。支援者に

必要な資質・能力の参考となる可能性がある。

### 5.3 今後の課題

- ・今回の活動は、子どもと大学生が 1 対 1 で活動することが重要であった。そのなかで、参加する子どもの人数の把握と参加する大学生の人数の把握が難しい時があった。
- ・参加した大学生は、本学の教職課程を履修している大学生 3 年生、4 年生である。なので、もともと他者への関心、他者と関わろうとする気持ち、他者へ貢献しようという意欲がある大学生である。このような特性のあるスタッフを集めることが重要である。
- ・今回の活動では、大学生と子どもとの交流は深めることができた。しかし、2つの FS の子ども同士の交流を深めることは、あまりできなかった。
- ・第 5 回活動で多様な他者をお呼びした。また、第 8 回ではゲスト講師をお呼びした。多様な活動を行うためには、様々な人や組織と連携する必要がある（大変なこともあるか）。
- ・第 6 回、第 7 回活動で、あるジブリ映画を採用したが、子どもの実態にあわせて、どの映画を選ぶのか、どの場面を選ぶのかを検討する必要がある。
- ・今回の不登校支援プログラムには、日本語をあまり話せない子どもや、話しかけてもほとんど反応しない子どもが来る可能性があった（実際には来なかったが）。そうした子どもは、この不登校支援プログラムには、十分に参加することは難しかったと予想される。この件は、FS のあり方を考えるきっかけとなった。話は飛躍するが、地方では FS の数が少ないといわれており、一刻も早く多くの FS を設置する必要がある。その一方で、都市部において FS の数が十分にある地域では、子どものニーズにあった FS を設置することが必要なのではないかと考えた（財政的な支援も含めて）。

### 5.4 まとめ

今回の活動で、子どもたちは満足した様子が見える。その根本には、子どもと大学生がコミュニケーションを密にし、活動の中に社会的居場所を構築できことがあげられる。そうした安心空間を創り出したことで、子どもたちは自分たちの将来について考えることができたと考えている。

## 第6章 フリースクール等における研究成果の実践

### 6.1 実践のための条件

#### <費用>

今回の活動を行うために、費用がかかった主要な物品等は、以下のものである。

#### ・第2回活動のポッチャ&モルックの道具

→ポッチャもモルックも1泊2日で数千円でレンタル出来るという情報がネットにある。また自治体によっては、ポッチャやモルック等のパラスポーツ用具の無料貸出しを行っている。

#### ・第4回活動のiPad mini

→今回のプロジェクトでは、短時間に10名以上の子どもが同時に他者紹介動画を作成するため、同じスペックのiPad miniを集める必要があり、費用が高くなった。しかし、型落ちで良ければ、2泊3日で1台3千円程度でレンタルできる。また、長時間に一人ずつ時間差で他者紹介動画作りをするならば、FSにあるタブレット端末かスマホが1台あれば、それを使いますこともできる。

#### ・第5回活動のゲスト講師への謝金

→多様な他者への謝金は、専門性にあまりこだわらず、近隣住民に声をかけることが出来れば、ボランティアで参加してもらうことも可能かもしれない。

以上のレンタルのネット情報は、中古品の状況や時間の経過により金額が大きく変動するので、ご自身で十分調べてもらいたい。

#### <支援者に求められるもの>

第4章で述べたように、大学生たちは3つの点で成長した。第1に「不登校」ラベルを剥がすこと、第2に不登校の子どもとの関わり方を学ぶこと、第3に揺さぶられる体験である。

こうした成長を遂げることができる人は、どのような人であろうか。最も大事なことは、人と関わるのが好きなことである。子どもたちと、共感的肯定的な関わりをするためには、そもそも支援者が人と関わることを嬉しいと感じることが出来ることが大切であろう。そして、今回はキャリア意識の向上をテーマとしているので、高校や大学に関して詳しい人であるとなお良い。

#### <人員>

・プログラムを実施するので、進行役（司会）が一人必要である。

・それ以外に、子どもの人数と同数のサポーターが必要である。今回のプロジェクトが上手くいった要因は、基本的には子どもと大学生がペアになり、伴走したことである。多くのサポーターが、FSにいない場合には、近隣の大学に相談すると良い。最近ではボランティア活動を推奨している大学が多い。また、「学生時代に力を入れたこと」（いわゆるガクチカ）を求めて、ボランティアをしようとする学生も多い。なので、サポーターを補充するためには、大学生にボランティアで参加してもらうと良い。

## 6.2 当該活動により効果が表れやすい子供

効果が現れやすい子どもは、以下の通りである。

- ・小学生高学年から中学生。
- ・性別は問わない。
- ・今回の不登校支援プログラムは、大学生と話すことが重要である。従って、ある程度、人と話することがきける子ども。
- ・大学に来るのに労力がかかるので、ある程度体力がある子ども（毎回参加できる子ども）。

## 6.3 望ましい場所・環境

- ・大学のキャンパス。
- ・静かな空間。
- ・ポツチャ&モルックができる広さ

## 6.4 フリースクール等での実践（少額の費用・少数の人員で実践する方法）

### <構成の仕方>

今回の不登校支援プログラムは、特別な構成のものではないので、FS でもすぐに実践することができる。手順等は、第2章を参照してもらいたい。

また、ポツチャ&モルックの道具や、iPad mini は、レンタル用品もあるようなので、それを活用する手もある。

第3回の共創ゲームは、市販されているゲームを変更して遊ぶものである。変更するときに、みんなで話し合いをするので、その時が共感能力等が向上する契機となる。費用としては、紙と鉛筆があれば良いので、かなり安価に活動できる。

第5回の多様な他者との出会いに関しては、前述したように、ボランティアで参加してもらう手もある。

第6回、第7回のジブリ映画からの気持ち探しでは、自分らしさを考えるテーマ、自分の将来を考えるテーマのアニメ作品であれば、ジブリ映画にこだわらず、また子どもの要望や特性を考慮して、いろいろな作品が選択肢として考えられる（DVD等もレンタル出来る）。

第8回の大学生のことを知ろう②では、<人員>の所でも述べたように、近隣の大学に大学生の派遣を依頼すれば、大学生から学生生活や将来についての話を聞くことができる。

### <効果の測定方法>

キャリア意識の測定は、キャリア意識に関する尺度を使用した。第3章に記載している参考文献を参照してください。

あとは、活動が終わった後、子どもたちの感想や意見をしっかり聞くことが大事である。

## 6.5 実践に向けた留意事項

### <子供に対する留意事項>

今回の不登校支援プログラムは、子どもと大学生が交流することが、何よりも重要であった。そうした点で、子どもと大学生が、1対1でたくさん話することができる環境を設定することが重要である。そのなかで、子どもに発言を強要せず、待つ姿勢が大切である。

また、子どもたちの将来を考えさせる活動であったので、子どもたちよりも年上の伴走者が必要である。

### <環境に対する留意事項>

子どもにとって安心できる空間で活動することが大切である。なので、子どもが活動を嫌がったら、強要しないことが大事である。また、活動をしなくても良い、退避スペースを設置することも必要である。

### ○謝辞

明治学院大学に来てくれた子どもたちとFSのスタッフには、深く感謝申し上げます。子どもたちが来てくれなければ、活動は継続できなかつた。また、大学教員の無理難題(!?)にも誠実に対応してくれた東京都子供政策連携室、アデコ株式会社パブリックソリューション事業本部の担当者には、大変お世話になった。この出会いが、子どもたちと大学生の将来に少しでも役立てば、望外の喜びである。

明治学院大学 石井久雄・日下虎太郎・岡田悠佑・杉岡千宏・坂口彩乃